

42311

教科書文庫

4
810
42-1933
200030/823

Kodak Gray Scale



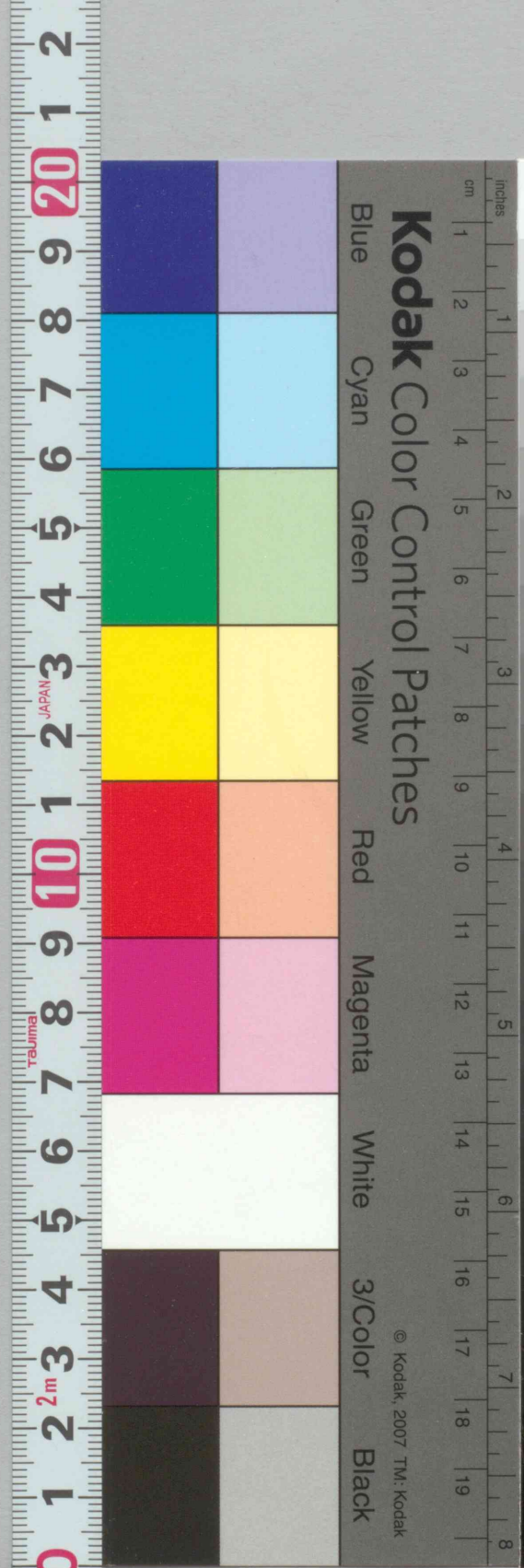
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3159
Ig1
資料室

純心女子園雑誌本

第十四号 力編

巻二



3759
Lg 2

資料室

文學博士 五十嵐力編

純心女子國語讀本

早稻田大學出版部發行



廣島大本營軍務御親裁

(明治神宮聖德記念繪畫館壁畫)

侍從武官長 岡澤 精

明治天皇

參謀次長 川上操 六

3759
Lg 2

資料室

文學博士 早稻田大學力編

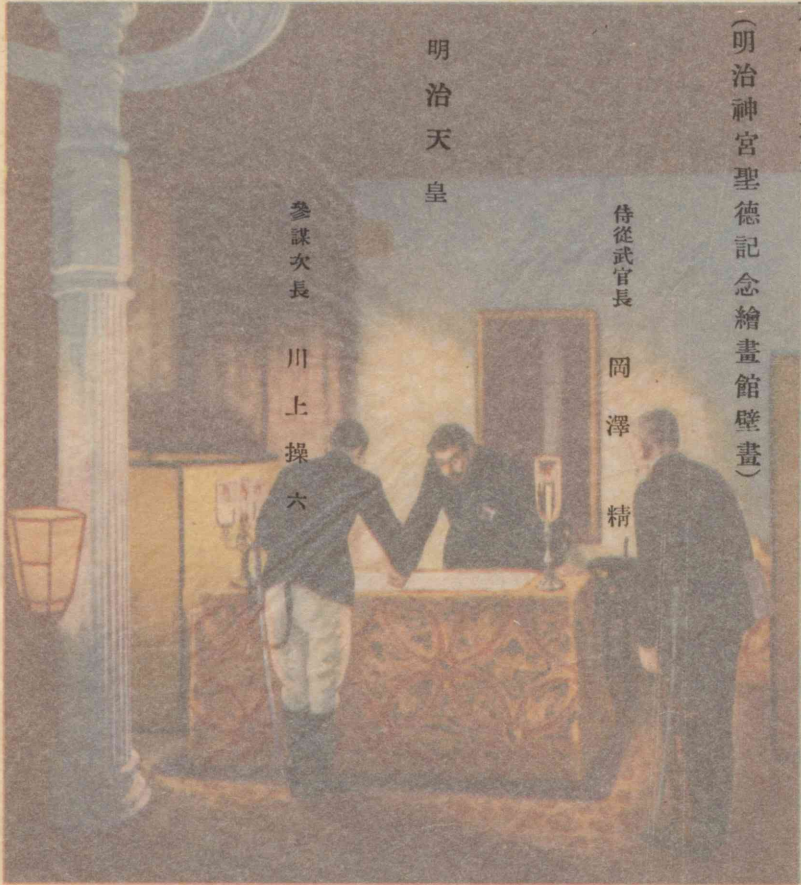
純心女子國語讀本

早稻田大學出版部發行



廣島大本營軍務御親裁

(明治神宮聖徳記念繪畫館壁畫)



明治天皇

侍從武官長 岡澤 精

參謀次長 川上 操 六

3759
Lg 1

資料室



瀧島大本營軍務廳陳設



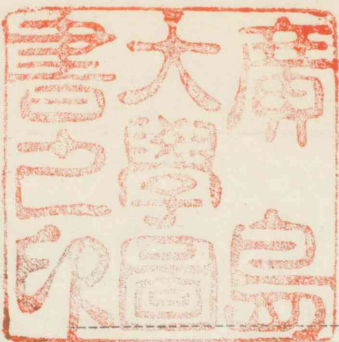
(即合輻宮聖廟信念繪畫前塑畫)

早稻田大學出版部發行

純心女子國語讀本
即前天皇

參編穴貝 川土 勉 六

文學博士 穴貝 勉 力 編



廣島大本營軍務御親裁

明治大帝は、日清戦争に際し、宣戦布告の翌月即ち明治二十七年(三五)九月より熾和條約の結ばれた翌年四月まで、八ヶ月の長い間、廣島第五師團司令部を大本營として、煩劇な非常時の軍務を日夜御親裁遊ばされた。御座所は師團司令部の木造洋館二階の極めて簡素な一室で、そこが御寢所でもあり、御休息所でもあつた。

本圖は、深夜蠟燭の光の下に戦況を聞き召さるゝところ、奏上してゐるのは時の參謀次長陸軍中將川上操六、右手に長つてゐるのは侍從武官長陸軍中將岡澤精である。明治神宮聖徳記念繪畫館にある壁畫の一つで、舊廣島藩主侯爵淺野長勳の奉獻にかゝるもの、筆者は廣島出身で我が洋畫界の重鎮なる南薫造氏である。

南氏は明治十六年廣島に生まれ、同四十年東京美術學校を卒業した。その後英佛に留學して、現に帝展委員、國民美術協會評議員、東京府美術館常議員である。

卷二 目次

一	現つ神明治大帝 (一)	編者	一
二	現つ神明治大帝 (二)	編者	八
三	現つ神明治大帝 (三)	編者	一七
四	感激の日章旗	布利秋	二三
五	子供好きの良寛上人	島崎藤村	三〇
六	樂聖ベートーエ	牛山充	三七
七	月の旅 (詩)	柳澤健	五〇

- 八 勞苦と快樂
- 九 仙人と石
- 一〇 小鳥の巢二つ
 - 一 鴉の巢の空中映畫
 - 二 鶯の巢のたより
- 一一 元七黒七鳥
- 一二 茹栗
- 一三 家庭は合作の藝術品
- 一四 母熊—子熊(4)
- 一五 冬の雪國(一)

- 小酒井不木 五二
- 薄田泣菫 六三
- 中西悟堂 七三
- 編者 七七
- 編者 八三
- 編者 九〇
- 市島春城 九四
- 相馬御風 九九
- 編者 一〇八

- 一六 冬の雪國(二)
- 一七 旅行先よりの年始狀
- 一八 元日や(俳句)
- 一九 紋所の話(講演)
- 二〇 スペクトラ
- 二一 小さい仕事の大きな意味
- 二二 雛人形
- 二三 笑ひごゑ(詩)
- 二四 愛犬ボチ
- 二五 婦人團體の母

- 編者 一二四
- 編者 一二九
- 内藤鳴雪 一二一
- 沼田頼輔 一二三
- 齋藤茂吉 一三六
- 羽仁もと子 一四一
- 西澤笛畝 一四五
- 川路柳虹 一五二
- 長谷川二葉亭 一五四
- 小野賢一郎 一六三

二六 世界無二の我が國體

下田歌子 一七四



純正女子國語讀本 卷二

一 現つ神明治大帝 その一

明治天皇御代知ろしめすこと四十五年、その間に於て我が國運は前古無比の興隆を見た。これ偏に廣大無邊なる陛下の御徳の賜であるといはねばならぬ。

天皇の御徳は、實に日の如く、神の如く、光の如く、慈雨の如しと申し上げてもよい。天皇は幼くして御位に即かせられ、國難の續き起る間に處して、連綿不斷に驚くべき努力の

天皇の御徳は、
實に日の如く、
神の如く、光の
如く、慈雨の如
しと申し上げて
もよい。

民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。

萬機總攬



明治大帝

修養を積ませられた。天津日嗣の御子たる事を深く御自覺ましまして、圓滿なる帝王の御氣象を備へさせられた。

民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。古を存して新しきを立て、我が長を養つて萬國の長を兼ねさせようとして、國家、國民を危険なく光明の理想地に導かうとつとめさせられた。

日月を理想として世界萬國に一視同仁の眦を向けさせられた。

日月を理想として世界萬國に一視同仁の眦を向けさせられた。日月を理想として世界萬國に一視同仁の眦を向けさせられた。その御慈しみはあまねく無心の生物にも及んだ。天皇御一生の御詠歌は十萬首に餘り、その一々が陛下の大御心そのまゝの表れであるが、これを拜しても、陛下の御盛徳が偲ばれる。

あさみどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

さしのぼる朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

わが心いたらぬくまのなくもがな

いそのかみ古き
ためし。

このよを照らす月の如くに
いそのかみ古きためしをたづねつつ

新しき世の事もさだめむ

たひらかに世は治りて國民と

ともに楽しむ春ぞうれしき

花見つつあそぶ春日におもふかな

たがへす民のいとまなき世を

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草の上はいかにと

民のため心のやすむときぞなき

身は九重のうちにありても

わが民草の上は
いかに。

九重のうち。

戦ひの場ばのおとづれいかにぞと

ねやにも入らず待ちにこそ待て

いたで負ふ人のみとりに心せよ

にはかに風の寒くなりぬる

よきを取り悪しきを捨てて外國に

おとらぬ國となすよしもがな

よもの海皆はらからと思ふ世に

など浪風のたち騒ぐらむ

おとらぬ國とな
すよしもがな。
よもの海皆はら
からと思ふ世
に。

天皇の數知れぬ偉大なる御行跡の中で、殊に有難きは、民
草に對する厚き思ひやりの大御心であつた。陛下は侍臣

等の御避暑御避寒を御勧め申すのに對して、曾て御聽き入
れ遊ばされたことがない。そしてそれが、兵士や農夫等の

詠寄國祝

歌

勤勞に對する厚き御同情と、國費を
節したまふ思召とによつたことは、
年年におもひやれども山水を

あらぬまじりて

（てよろつたみいこ

ねむるかくにい老

布良ま

明治天皇宸筆

習地から宮城に還御あるやうに御願ひいたしたところ、い
陛下には、玉體御安泰のため、日々演
陸軍大演習を行ふ計畫があつて、
た崩御の少し前、東京の近縣に於て
の御製によつても拜察される。ま

詠寄國祝
あらたまのとし
をむかへてよろ
づたみひとつこ
ころにくいは
ふらし

努力勵精の御修
行

石黒忠恵
退役陸軍軍醫總
監 子爵 樞密
顧問官 新潟縣
の人。弘化二年
生。

つまでも御許可がなかつた。その中に期日が迫つたので、
取急ぎ御裁可を願ひ出でると、兵士どもは日々營舎には歸
らぬであらう、朕一人が宮城に歸るのでは、統監のかひがあ
るまい。と仰せられたので、恐懼して、演習地に御宿泊を願ふ
ことに改め、始めて御裁可が下つたといふことである。
明治天皇は實に偉大なる帝王の天資を具へさせられた
上に、更に努力勵精の御修行を積ませられた名君であらせ
られた。我等はその御偉徳、御仁慈の最もよく纏つて現れ
た一節として、子爵石黒忠恵氏の謹話の一節を引くことに
する。

明治二十七八年
(二五四—二五五)

大帝に咫尺し奉
るの光榮を得
た。

恐懼感激に堪へ
ぬ。

二 現つ神明治大帝 その二

石黒子爵は言はれる。

明治二十七八年の日清戦役に際して、私は野戦衛生長官の役目を承り、凡そ一箇年、間、廣島の大本營に於て、明
治大帝に咫尺し奉るの光榮を得た。その一年の間、
日々御側に罷り出でて、拜見し、拜聞して、誠に恐懼感
激に堪へなかつたことが澤山ある。



石 黒 子 爵

扈從。

奉伺。

九月の十五日、廣島に御着きになると、私は停車場から扈從して、大本營へ行つて、二階に上つた。見ると、廊下の向うに扉があつて、大帝はそこから入御になつたが、やがて御部屋の中なる玉座の御椅子に御掛けになつた。私は御前に罷り出でて御機嫌を奉伺した。それから各室を一應檢分しようと思つて、案内者を連れて廻つて歩いた。

「御寢所はどこか。」

私はまづ尋ねた。案内者は答へた。

「御寢所と申して別にございません。」

「どうして御寢み遊ばすのか。」と、重ねて尋ねると、

「御座所のうしろに立ててある、あの御屏風の陰に御寢臺

がありまして、御寢みになる時には玉座を他に移して、か
りに御寢臺を置き、御屏風で圍んでそこに御寢みを願ふこ
とになつて居ります。」
と答へた。御座所も御寢所も一つだといふのである。私
は驚いた。

「では御休息所は？」と尋ねると、それもないといふ。

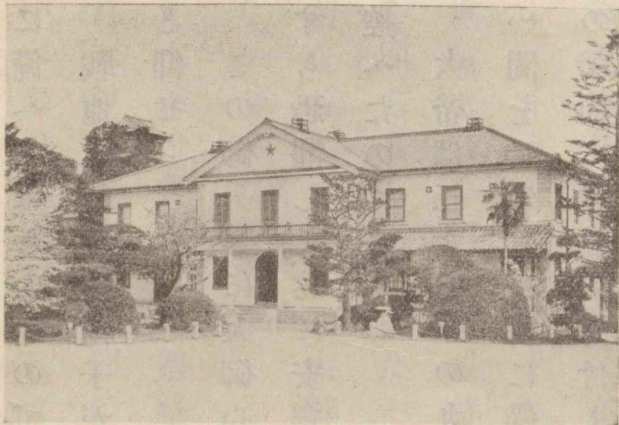
私は愈々恐懼に堪へなかつたので、よく聞き糺して見ると、
先日、既にくはしい圖面を以て、宮内省を経て奉伺の上、右の
通り定めたといふのである。いかに戦時の行在所である
とは申せ、畏くも至尊の御身を以てして、御寢所も御休息所
もない、たゞ一間だけの御座所とは、何といふ畏れ多いこと

聞き糺す。

感極まつて涙を
呑む。

であらう。私は感極まつて涙を呑むより外なかつたので

ある。



この御座所は斯様に手狭な上
に、御室の御備へ品としては、不斷
御掛けになる御椅子一つと、臣下
に座を賜はる時の椅子が三つあ
り、御前には卓子一脚と御寢臺、御
書物の御筆筒と御屏風が二雙あ

るだけで、他には何の御裝飾もな
いといふ、極めて簡略なものであ
つた。そこで宮内省の人が、これでは如何にも御窮屈で畏

卓子一脚、屏風
二雙。

大御心の忝さを
拜し奉る。

れ多いから、たまには御休息遊ばすために安樂椅子を御室に備へてはといふので、御意を伺ふと、大帝は、「戦地には安樂椅子が備へ付けてあるか」と仰せられた。

この御一言に大御心の忝さを拜し奉つた宮内官は、ひたすら恐懼して、遂に安樂椅子さへも御室に入れることを差控へたのである。

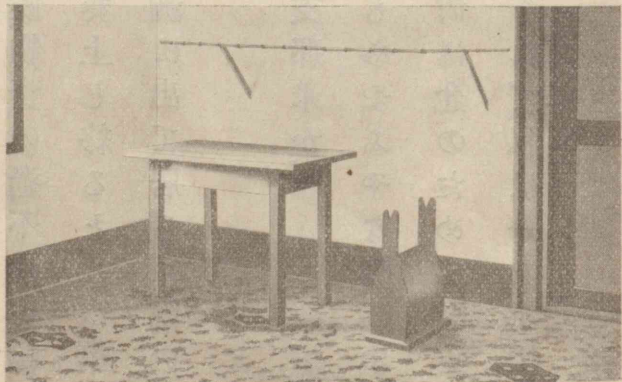
大帝は二十七年の九月から翌年の四月まで、八ヶ月の長い間をこの御座所に過ぐさせられたのであるが、殊に酷寒の季節に暖爐の備付まで斥けさせられて、四十二疊敷の御室に僅か火鉢二つで御凌ぎ遊ばしたといふのは、何といふ

tent.
barrack.

これは畢竟、國民と辛苦を分たせらるゝ大御心に外ならなかつた。

畏れ多いことであらう。これは畢竟、大本營の御座所に在らせられても、テントやバラックの内にあつて、寒氣と戦ひつゝある將卒と苦しみを同じうし給ひ、また一般國民と辛苦を分たせらるゝ大御心に外ならなかつたのである。

大帝は非常に御嚴格にあらせられたけれども、その間にまた何ともいへぬ御温情があらせられた。その年の十月二十五日のことである。私は戦地を一巡して來いとの仰せを蒙り、直



廣島大本營の御調度御机御刀掛御衣箱

ちに廣島を出發して戰地に赴き、各地を視察して、十一月二十四日の夜、廣島に歸つて來た。さうして翌日の御軍議の際、視察先の將卒の健康状態、士氣、氣候、物資の過不足、運輸の便否等について詳細に奏上したが、奏上し終ると、まづ第一に御下問になつたのは、朝鮮及び滿洲に出て居る軍隊の糧食に就いてであつた。

「飯は朝鮮米か、日本米か、それとも支那米か。」

かういふ御尋ねに對し奉つて、苟もあやふやな事は申し上げられぬ。記憶して居る事でも、尙ほ念のために調査した上でなくては御答へが出来ぬ。それで、私は一々手帳を見て、たとへば、

審かに言上。

重ねての御下問である。

「平壤に居ります兵は、朝鮮米を食べて居ります。義州に居る兵は、朝鮮米と日本米とを交ぜて食べて居ります。」といふ風に、審かに言上した。さうすると、
「朝鮮米には砂が澤山混つて居るといふことを聞いて居るが、その朝鮮米を食べて居る兵が、齒を痛めるとか、腸胃を壊すとかいふことはないか。」
と、重ねての御下問である。私は實に恐れ入つた。そしてかく御答へ申し上げた。
「朝鮮米を食べては居りますが、その飯には砂が混つて居りませぬ。凡そ朝鮮米に砂が多く混つて居りますのは、朝鮮では稻を刈ると、陸田ならば直ぐに地上で乾かし、水

御機嫌麗しく。

田でも乾田の上に乾かして置いて收穫を致しますから、その間に砂が多く混るのでございます。しかし朝鮮で飯を炊きますには、内地の如き米磨桶こまを用ゐず、くり鉢せきで米を磨ぎます。そのくり鉢の底には、轆轤こまで渦巻が彫り付けてありますので、それに米を入れ、水を入れて磨ぎますと、砂は重いので皆渦巻の中に入つてしまひますから、自然に除かれます。随つて飯には砂が混りません。どうぞ御安心遊ばすやうに願ひ上げます。」

三 現つ 神明治大帝 その三

これも同じくその戦地巡廻の折の話であるが、私は十一月二日に朝鮮の漁隱島を出帆して、翌日兵站司令部のある兀浦クインポに着いた。その司令官は陸軍少佐山縣俊信君であつた。私はその巡視を終へて、直ぐさま出發しようとする時、山縣司令官が引きとめて言ふのに、
「暫くお待ちを願はれますまいか。實は現在ここに、將校下士卒から軍夫まで加へて八十三人居りますが、正午にはそれらが全部山の上に登つて、盃を舉げて天長の佳節を祝し、陛下の萬歳を唱へたいと存じてゐるところであ

漁隱島
朝鮮南部の島
兀浦
朝鮮南岸にある町。

天長の佳節。

音頭を取る。

ります。そこへ閣下の御來臨は願つてもない幸ですが、
どうか一つ音頭を取つて戴きたい。」
といふのである。私も大いに喜んで、

酒が一樽、鏡を
抜いてある。
はたと困つた。

「それは結構な事ぢや。此方から願つても致したい位で。」
と答へた。それから十一時に、司令官と一緒に山の上に登
つて見ると、兵站部で用意した酒が一樽、鏡を抜いてある。
またその傍には、焼鯛を裂いたのが箆に堆く盛つてある。
が、肝腎な盃がない。司令官は、これを見てはたと困つた。
私も氣の毒に思つてゐると、司令官が俄かに手を拍つて喜
んで、

「いや天佑々々。濱邊へ行くと牡蠣の貝が澤山ある。――

屈竟の盃。

閣下、屈竟の盃が思ひつきました。」
と言つて、直ぐに従卒をやつて蠣殻を拾はせた。暫く經つ
と、二人の従卒が箆に一杯づつ、きれいに洗つた蠣殻を持つ
て來た。

その時はもう十二時に近くなつたので、一同山上に整列
してゐると、麓から一人の軍夫が、
「お待ち下さい。お待ち下さい。」

と言つて駆け上つて來たが、見れば手に日の丸の旗を持つ
てゐる。一同の視線は悉くその軍夫に集つた。どうした
のかと怪しんでゐると、彼はやがて私の前に立ち、その日の
丸の紙旗を差出して、

一同の視線は悉
くその軍夫に集
つた。

「閣下、これで音頭を取つて下さい。」

と言つた。私は直ぐにそれを受取つて、高く捧げつゝ、日本の方に向つて、恭しく「天皇陛下萬歳！」を三唱した。一同はこれに和した。それから皆飲め／＼といつて、牡蠣の貝で盛んに祝盃を舉げた。

その時振つた旗を、あとになつてよく見ると、驚くではないか、半紙に梅酢で紅く日の丸が染めてあつて、ところ／＼にまだ紫蘇の葉が附いてゐる。それを飯粒で細い竹に貼りつけたのである。私はその牡蠣の貝と梅酢の旗とを靴の中に入れて持ち歸つた。

さうして大本營に於て、陛下にこの事を奏上して、その二

驚くではないか、半紙に梅酢で紅く日の丸が染めてあつて、ところ／＼にまだ紫蘇の葉が附いてゐる。

川上操六

當時參謀次長兼

兵站總監

寺内正毅

當時野戰運輸通

信長官

野田裕通

當時野戰監督長

官

岡澤精

當時侍從武官

長

ひしと胸を打た

れた。

品を取出して御覽に入れた。すると、大帝はじつとそれを

御覽になつていらせられたが、そのうちに畏くも御眼に涙

を御催しになつた。それを拜して、御前に畏つてゐた私は

勿論、川上も、寺内も、野田も、岡澤も、皆感極まつて泣いた。

梅酢で旗を染めて聖壽を千里の外で祝し奉るといふ民

があるのは、これを御覽になつて御涙を催し給ふ君がおは

すからだ、私はその刹那に、ひしと胸を打たれたのである。

それから、まだ恐れ入つた事がある。ちやうどこれらの

事を奏上し終つた時である。陛下は突然、

「その司令官の山縣といふのは、あの西南の役の山縣か。」

と御尋ねになつた。私は、

殊勳

「いかにも仰せの如く、西南の役に殊勳のありました山縣俊信でございます。」

何といふ有難い
畏れ多いことで

と御答へ申し上げた。これは山縣があゝの戦役に殊勳があつたので、特に勳四等に叙せられたのを御記憶あらせられたの仰せである。西南の役以來十八年、當人は既に退役してゐたのを、この戦争で召集されて、兵站部司令官となつて出征したのであるが、大帝は今や卒然として、それは西南の役の山縣か。」と御下問あらせられたのである。恐れ入ると共に驚き入らざるを得ないではないか。いくら軍功があつたにせよ、一大尉の名を十八年間も御記憶になつていらせられるといふことは、何といふ有難い畏れ多いことであらう。

あらう。

その晩、私は山縣に長い手紙を書いて、この君恩の忝さを傳へた……

これが石黒子爵謹話の大意である。我々は大帝の御君徳、御仁慈に對して、實に言ふべき言葉を知らぬ。

四 感激の日章旗

布 利 秋

時は忘れもしない、一九二三年の十一月三日であつた。

ガリチャの山中には、二百メートルの谷底に大都會があるといふので、それが見たさに、わざく、この東ガリチャまでさまよひ來たのであつた。來て見ると、ガリチャ連峰が晩秋の紅葉に包まれ、山々の尖頭には眞白に雪がかぶさつて、

布 利秋

旅行家 隨筆家

愛媛縣の人

明治二十二年生

一九二三年

大正十二年(英

三)

Galicia

ポーランドの南部地方。

油繪を眺めるやうな絶景。
Zabie.

三哩
約五キロ。

町らしいものが
ちら／＼する。

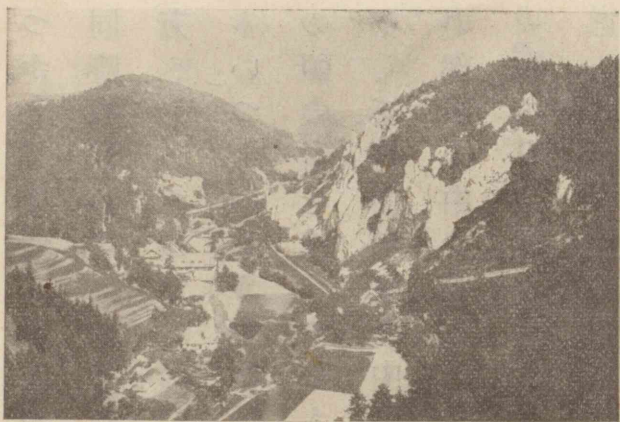
油繪を眺めるやうな絶景である。その日はちやうどザビエといふ田舎町に通ふ乗合のぼろ馬車に乗り合はしたが、途中に断崖から崩れ落ちた岩石のために「通行止」になつて



布利秋

ある所があつたので、そこから臨時に引返すことになつた。けれども私はザビエの町がもう三哩ばかりだと聞いたので、たゞ一人薄暗い密林の中の細路をテク／＼と歩いて行つたが、やがて密林を通りぬけると、うねつた道の長くつゞいた廣い野原に出た。見ると、遙か向うに、煙の立つてゐる町らしいものがちら／＼する。

Shock.
感動。



ガチリヤの高原

あ、あれがザビエの町であらう！ かう思ふと、今までの疲労をすつかり忘れ去つた氣分になつた。それから白樺のまばらに立つてゐる細道を元氣よく進んで行くと、一軒の藁家の庭先に日章旗の翻つてゐるのが目に映つた。私はそれを見た瞬間、胸がドキンとするほど強いショックを受けた。かういふ野原の、しかも異國の片田舎で日章旗を見ようなどとは、夢にも期待しなかつたからである。それに

久しく日章旗に
飢ゑてゐた。

私は、久しく日章旗に飢ゑてゐた時ではあるし、あまりのなつかしさに、覺えず涙が頬を傳つてゐるのに氣がついた。同時に私の足は、いつしかその日章旗の翻つてゐる小家の方へ急いでゐた。

いつたいどうした日章旗だらうと、いろ／＼な疑問が私の頭の中を往來するうちに、私はもう小家の前に來てゐた。そして夢中で家の中に飛び込んでしまつた。すると薄暗い部屋の中から、

Japansky.

「あッ！ ジャポンスキー！」

といふ叫が起つたではないか。同時に一人の老人が飛び出して來て、私の體からだにしつかりと抱きついたではないか。

Poland.

私はあまりの意外に覺えず後退おとざりりした。「何のための日章旗であらう。このガリチャの山中で。しかも明治天皇の御誕生日に於て。しかも見ず知らずの日本の旅人に、この片田舎に住む外國の老人が飛び出して來て抱きつくとは。」私は怪しみつゝ、早速老人に説明を求めた。

老人はポーランド人で、我が明治天皇の御誕生日を忘れることの出来ないゆかりを有つ者であつた。彼は老眼に涙を湛へながら物語つた。

私は日露戦争の當時、ステッセル將軍の配下だつた者です。旅順口が陥落すると、私は日本軍の捕虜となりました。捕虜となるまでは、我々の間にいろ／＼な噂が飛ん

日露戦争
明治三十七年三
五月—同二十八
年(1904)。
Stissel.
當時ロシアの旅
順要塞司令官。

伊豫の道後
松山市外の温泉
場 工七人

で、今にも手足がバラ／＼に切斷され、耳も鼻も削がれるかのやうにびく／＼してゐましたが、扱つかいよく捕虜とらになつて、伊豫の道後といふ名所の温泉地に收容あづかされてみると、噂とは大違で、われ／＼一行は、まるで國賓のやうな身に餘る待遇を受けました。そしてしみ／＼と日本人の立派な道徳を知ることが出來たのでした。殊に私は俘虜生活中に、國に残してある老母危篤の報知を受けて、自分だけが特に他の仲間より先に歸國を許されたのでありましたが、これは全く限りなきミカドの御仁徳によるもので、忘れようとしても忘れられぬ感激でありました。その時も私はたゞ夢中になつてミカドの萬歳を叫

んだのでありましたが、それ以來年々十一月の三日が來る毎に、その日を待ちつけては、この通り日章旗を掲げて、遙かに大日本のミカド陛下の御仁徳を偲び奉つてゐるのです。

四方山の話

聞き終つて、私は覺えず全身が痺れるばかり感激に打たれたのを感じた。主客はやがてくつろいで四方山の話に興じた。海外萬里の地で、十一月の三日にはからず日章旗を拜む。そして明治天皇の御仁慈に泣く外國の老人に心からの茶菓を振舞はれる。私はこれを一生に二つとはない大切なエピソードとして、胸の中にたくはへてゐるのである。

episode
挿話

島崎藤村
詩人、小説家
名は春樹
長野縣の人
明治五年生

ほんとに子供のお友達になり生まれて来たやうな人で。

五 子供好きの良寛上人 島崎藤村
良寛上人は越後の國の出雲崎といふ所に生まれた人でした。髪を剃つてお寺に入つたのは十八歳だといひますが、それから七十五歳のおぢいさんになるまで生きてゐた、名高い坊さんでした。この良寛上人は世にも珍しいほど子供の好きな人でした。ほんとに子供のお友達になり生まれて来たやうな人で、行く先々で男の子や女の子と一緒に遊んで遊びました。「良寛さま、お遊びなさいな。」と子供が言へば、上人はさういふ子供を相手に隠れんぼなどをして、日の暮れるのを忘れるくらゐの人でした。

子供の世界は火の消えたやう。

この子供好きの良寛上人が、越後の國の三島郡といふ所の或村で亡くなつた時は、子供の世界は火の消えたやうになりました。七十になつておはじきをしたり、手毬をついたりしたほどの上人ですから、達者な時分には、どうして隠れんぼどころか、随分思ひ切つた子供らしい遊をして幼いものを悦ばせました。
上人はよく死んだ者の眞似などをして路傍に横になつ



良寛上人と子供

子供たちのすることを楽しむやうな人でした。

てゐたこともありました。それを見ると、子供たちは大喜で、その上から草をかける、木の葉をかける、しまひには木の葉や草で上人を埋めてしまつて、笑ひ楽しんだこともありました。そんないたづらをする子供たちが、木の葉や草を集めて運んで来る間でも、上人は靜かに路傍に横になりながら、子供たちのすることを樂しむやうな人でした。どうかするとその死んだふりをしてゐる上人の鼻をつまみに来るやうな、そんな悪ふざけをする子供があつても、それでも腹を立てませんでした。それほどまでに上人は子供を愛しました。

良寛上人が亡くなりましてから、がっかりしたのは子供

たちでした。あんな好いお友達がゐなくなつたものですから、俄かに寂しくなつたのです。

その頃村はづれの百姓の家に飼はれてゐる馬がありました。その馬は鳴き聲からして愚かな馬で、あたりまへの馬のやうに「ひいん」とは鳴けなくらくらゐるものでした。

「あゝん。」

その愚かな馬の鳴き聲を聞いたばかりでも、子供たちは吹き出してしまひました。ところが、不思議にもその「あゝん」が子供たちの氣に入りました。どうかすると馬は途方もない大きな聲を出します。すると遠い所にある子供たちまで、その聲を聞きつけて馬を見にやつて來ます。その

大きな圓い眼の
ふちへ皺をよせ
て笑ひました。

馬は愚かなものではありましたが、おとなしくて、いつの間にか子供たちの遊び相手になりました。それに小さな馬の割合には力がありまして、子供を背中に載せては、よくそこいらを樂しさうに歩きまはりました。どうかすると、いたづらな子供たちが尻尾などを引張りまはしても、馬はかへつてそれを嬉しさうにして、大きな圓い眼のふちへ皺をよせて笑ひました。

「まあ、あの馬の鳴き聲は、嬉しくてあんな聲を出すんだらうか。それとも何か不足で、あんな聲を出すだらうか。」と、村の人たちは言ひ合つて、馬の「あゝん」を聞く度に笑ひました。

正月の六日は亡くなつた良寛上人の命日にあたりました。その日が來ると、村の人たちは上人の好きなものを思ひ思ひに佛様へ上げました。そして、あれほど子供の好きな上人のことだから、御自分の御命日には、きつと、みんなと遊んで下さつた時と同じやうに、面白い笠をかぶり、杖をつき、乞食坊主のやうなかまはないなりをして、諸方の家へ來て下さるだらうと言ひました。上人の形見の品として、あの立派な字で書いた額や掛物を大切にしてゐる家では、せめて私どもの門口にはお立ち下さりさうなものだといひました。いや他の家へはお寄りにならなくとも、あの子供好きな上人が手製の毬を大切にしてゐる私どもへはお見

佛様の思召に叶
うたかして、馬
の頭からは御光
がさしておまし
た。

えになるだらうと言ふものもありました。
その命日の夕方に、村の子供たちは、例の愚かな馬のゐる
百姓家を見に行つてびつくりしました。なぜかといひま
すに、そんなきたない馬小屋の中にあるものでも佛様の思
召に叶うたかして、馬の頭からは御光がさしてゐましたか
ら。その時になつて、子供たちは、あの良寛上人が亡き後ま
でも自分たちを愛してゐて下さることを知りました。そ
してあの上人の來て下さるといふ家は、形見の額や掛物を
大切にしてゐる家でもなく、上人が手製の毬を大切にしてい
る家でもなく、やはり子供の好きな馬のゐる貧しい馬小
屋の門口だといふことを知りました。

牛山 充

音樂評論家
長野縣の人
明治十七年生

Ludwig von
Beethoven,
(1770—1827)

moonlight
sonata.

六 樂聖ベートーゼン 牛山 充

秋になると楽しい音樂の季節が始ります。これは歐米
諸國も日本も同じことで、空が高く澄み、月の光が冴えて來
ると、自然に人の心が洗ひ清められて、高尚な音樂心が喚び
起されるからでせうが、この季節になつて、そゞろに思ひ出
されるのはベートーゼンの傑作「月光の曲」と、この曲の由來
について語り傳へられる若い靴屋の盲目な妹娘の美しい
物語です。あなた方は已にこの名曲をも物語をもお知り
になつてゐることとせう。ほんたうに佳い物語ですが、實
話ではありません。しかしかういふ美談が生まれるには、

それだけの理由があるのです。



牛山 充

ベートーヴェンは子供の時から苦勞をした人で、氣の毒な人たちに對する同情心の非常に深い人でありました。彼がその収入の半ば以上をさいて困つてゐる人たちを救ひ、また幾度となく慈善音樂會などを開いて不幸な人々に盡くしたことは、あまねく人の知るところであります。

時代は英雄を生むといひますが、いかにもその通りで、十八世紀は各方面に多くの人傑を出しました。ナポレオン、

Napoleon.
(1769—1821)

Wellington.

(1769—1852)

イギリスの名將。

Goethe.

(1749—1832)

ドイツの文學者。

Blake.

(1757—1827)

イギリスの詩人。

Mozart.

(1756—1791)

ドイツの音樂家。

不世出の天才。

時代と國境とを超越して。

空前絶後の樂聖。

エリントン、ゲーテ、ブレイク、モーツァルト、いづれもそれだけの方面に於ける不世出の天才で、偉人中の偉人といはれる人達です。しかし、その悲壯な生活と偉大な藝術とにより、時代と國境とを超越して多くの人々を動かし、多くの人々に力と希望とを與へた點に於ては、何人もベートーヴェンの右に出ることが出来ずまい。彼が空前絶後の樂聖として崇められ、世界屈指の大藝術家と仰がれるのは、決して偶



ベ - トー - ゼン と 少 女

Bonn.
ドイツのライン
河畔の都會。
tenor.

然ではないのです。ベートーゼンは七人兄弟の二番目に生まれました。そしてその下に五人の弟妹を有つてゐましたので、駄々子の我儘な眞似などは、彼に取つて思ひもよらぬことでした。父はボンの選舉侯に仕へたテナーの唱歌手で、収入が僅かであり、しかもその大部分を酒のために浪費して、少しも家を顧みませんでした。病身の優しい母親はこれがために大勢の子供を抱へて苦勞を重ねましたが、これを見かねて、ベートーゼンは健氣にも十一の時から劇場に勤め、母を助けてよく弟妹の世話をしました。主君の侯は少年ベートーゼンの感心な心掛と秀でた樂才とを愛し、十四歳の時に

健氣にも。

拔擢。
pound.

Wien.
オーストリアの
首府、ダニュー
ヴ河畔にある。

雄心勃勃として
抑へ難く。

拔擢して宮廷附の樂師に任じ、年額十五ポンドの俸給を與へて、その家計を助けられました。



モーツァルト

當時歐洲に於ける音樂の中心はギーンで、その道の大家は多くこの都に集つて居りました。隨つて名を天下に知られるには、どうしてもこの都の中央樂壇に出なければなりません。十歳の年長なるモーツァルトの成功を聞くにつけ、ベートーゼンは雄心勃勃として抑へ難く、母の許を得て十七の時始めて都に出て、出世の機會を求めましたが、モーツァルトに面會して、與へられた課題に對す

る即興演奏に非凡な才能を現して、將來の雄飛を豫言されたのはこの時のことです。

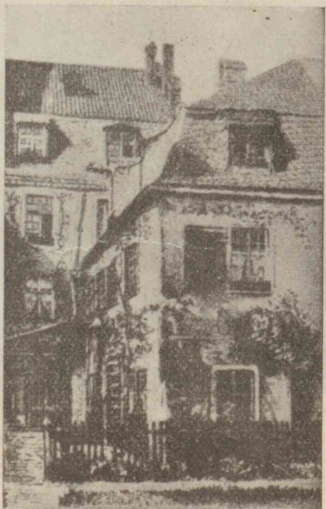
その中に故郷なる母親重病の悲報に接したので、孝心深いベートーゼンは大急ぎに歸郷して、わづかに母の死に目に會ふことが出来ました。母が亡くなつてから、父の酒癖はますます悪化して來ました。やがて、宮廷では給料を父に渡さずして、ベートーゼンに支給することになつたので、ベートーゼンは子供ながらも家長代りとなつて弟妹の扶養を一身に引受け、収入の不足をばピアノを教へて補充しつゝ、貧しい生計を立てましたが、その樂才はやがて上下の認めるところとなつて、多くの立派な後援者を得ました。

piano.

pianist.

かうして五年間苦闘をつゞけるうちに、弟妹も大きくなりましたので、二十二歳の時意を決してまたギーンに出ました。選舉侯もこの思立を賛成して若干の金子を恵まれたので、程なく二人の弟を呼び寄せてその面倒をみながら研究をつゞけ、一七九五年、二十五歳の年には、ピアニストとしても作曲家としても、立派に世に認められるやうになりました。

それまでベートーゼンは箇人の客間で演奏してゐただけでしたが、この年慈善音樂會に出演したのが彼の音樂家

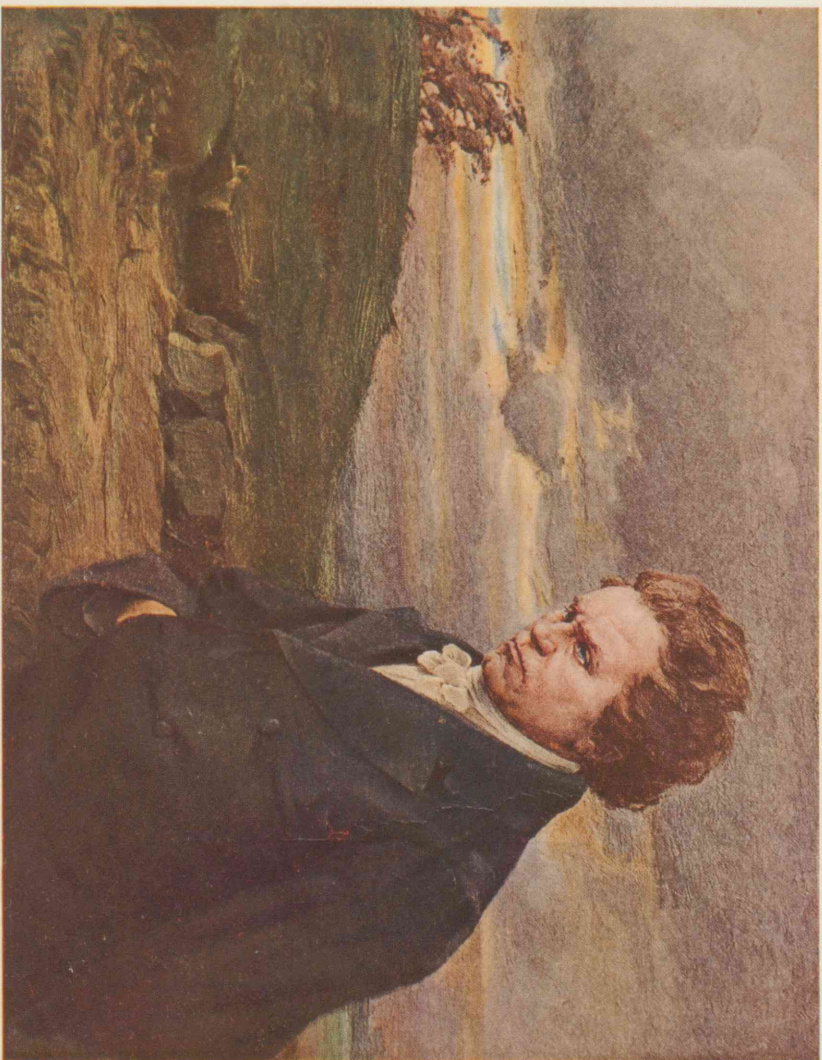


家生のンゼートーベ

Vogelar
(1765-1848)
醫師。ベートー
ヴェン傳記編纂者
の一人。

生活の第一歩であつたのです。それから間もなくギーン
樂界の寵兒となりましたが、成功の絶頂に立つた時に於て
も、絶えず貧しい人々のために盡くすことを忘れませんで
した。彼は一八〇一年、故郷の舊友ゾーゲラーに寄せた手
紙に、かう書いてをります。

「……こゝに困つてゐる友人があるとする。そして直ぐ
にこの友人を助け得る金の持合せがない場合にも、ちよ
つと机に向ひさへすれば、瞬く間にその困窮を救つてや
ることが出来るといふことは何といふ喜でせう。……私
の藝術は貧しい人々を救ふこと以外の目的に獻げられ
てゐるものではありません。」



ベートーヴェン

Graz.
オーストリア東
南部にある都
會。

Baden.
ドイツ西南部の
都會。

Karlsbad.
温泉地。チェコ
スロヴァキヤのボ
ヘミア州にあ
る。

café.
Restaurant.

不世出の英雄的音楽家ベートーゼンは、四
十歳に近づいてから聴覺を失ひかけた。同時
に段々社交を厭うて、生來の散歩癖が一層寡
つて来た。

圖は散歩しつつ樂想を練るベートーゼンで
ある。そのうつむいた顔欄々と痼きながら外
を見ずして我が頭の中を見ているやうな眼、
極度に締まった口、胸を痛はつてゐる如き手
首。彼の現した凡ては、我を見よ、聽けよと
て迫つて来る、外面の草木をも、光をも、雲
の動きをも、風の音をも、一切無視して、我
が腦裏胸底の樂想を懸命に保護養成しようと
してゐるやうではないか。

ベートーゼン

一八一二年にグラーツで慈善音樂會が開かれた時、主催
者は、ベートーゼンの人となりを知つてゐて、助力を求めま
した。彼は生憎手許に金がなかつたので、早速自作の「橄欖
山」及び「合唱幻想曲」の樂譜に、原稿のまゝの樂譜二三を添へ
て寄付し、これに對して先方の申し出た代價をどうしても
受取らうとしました。その後バーデンに大火があ
つた時には、罹災者の慘狀を見かね、率先してカルルスバー
ドで慈善大音樂會を開きました。かういふ美舉は數へさ
れない程多くあります。

ベートーゼンは生涯獨身で過ぐしましたので、借家住居
のことが多く、食事も大抵カフェーやレストランで取りま

美酒佳肴。

勢家權門。

王侯貴族。

至純な人格に心服。

したが、決して美酒佳肴を口にせず、衣服も極めて質素で、餘分の金は悉く肉親や友人の窮乏を救ふために使ひました。ベートーゼンはかやうに貧しい人には親切で、弟子にも優しくしましたけれども、勢家權門に阿ることは大嫌で、この點ではお世辭のよいゲーテと全く正反對でした。それでも王侯貴族が争つてこの樂聖の意を迎へて逆らふまいとつとめたのは、無論その不世出の天才によるのですが、一つはその至純な人格に心服したからであります。ベートーゼンはその天才を完成して多くの大曲を遺しました。貧しき者苦しむ者のために十二分の慈善を行ひました。またその藝術と人格とによつて一世の尊敬を一

身に集めました。かう數へて來ると、彼は人

(下) 蹟筆のソートーベ



(右) 譜樂の初最

生の幸福を極め盡くしたかのやうに思はれますが、これらの凡てを忘れるまでに彼の心を暗くしたのは、その健康上の損失です。彼は壯年の頃から聽覺喪失の徴候を見始めましたが、治療の方法を誤つたため、遂に全く聽覺を失ひました。音を生命とする者にとつて、これは實に致命的の痛手です。殊にベートー

致命的の痛手。

不朽の大作。

言語道斷。

Schiller.

(1759—1805)

ゲーテと並び稱せられた詩人。

音樂藝術の金字塔。

苛酷な運命。

のを恐れたため、その苦しみはまた特別で、これがために自殺しようとしたことも度々あつたと申します。しかしその度毎に、彼はまだく世のため人のために盡くし得る命を自ら絶つのは神意に背くと考へて、勇氣を振るひ起し、病苦と戦ひつゝ、次々に不朽の大作を完成したのです。その志の悲しさ、美しさ、尊さは、實に言語道斷といはねばなりません。彼がシルレルの「歡喜の頌」に作曲した合唱附の第九交響曲「莊嚴彌撒」は、古今を通じて音樂藝術の金字塔であるといはれる傑作ですが、この二曲を始め、作品中のおもなものは皆この耳の病苦に悩み、苛酷な運命と戦ひながら書き上げたもので、人間の精神の力がいかに偉大であるかを物

勝利の記念碑。

心血を濺ぐ。

Cherny.

(1791—1857)

オーストリアの人。ベートーエンの高弟で、作曲家として有名である。

語る、最も光輝ある勝利の記念碑であります。

世にはたゞ耳を喜ばせるに過ぎない娯樂的の音樂が多いものです。音の戯れ以上に出ないものが、誤つて名曲と考へられることも度々あります。ベートーエンはこれらとはすつかりその選を異にして、常に精神の音樂を書きました。この樂聖の心血を濺いだ傑作が聽く人の心を揺り動かし、名狀することの出來ない感動を與へるのは、一にこのためであります。

あなた方の中にはピアノを弾かれる方がありませう。もし稽古が進んでツェルニーの練習曲に入られた方があるならば、その人はベートーエンの孫弟子になつたのです。

この曲の中にはツェルニーがベートーゼンから習つたものがはひつてゐるからです。また既にこの練習曲を習ひ上げて樂聖自身の手になるピアノ曲を學んで居られる方があるならば、その方は或意味に於て、この樂聖から直接に教を受けて居られるのです。藝術家はその作品を通じてのみ最も正しく自己を語るのので、我々とベートーゼンとの關係には想像以上非常に親しいものがあります。

七月の旅

柳澤健

柳澤 健
詩人、外交官
福島縣の人
明治二十二年生

小鳥眠れる丘の木立を、
月はしづかにのぼりてきたる。

夢みてねむれる
小鳥を見すて

丘越え、谷越え、
はてなき旅に。



月よ、月よ、木立をはなれて、
ひとり いづこへ さまよひいづる。
夢みてねむれる小鳥を見すて、
ひとり いづこへ さまよひいづる。

月はこたへず さみしくほゝるみ、
はるけき空へと さまよひいでぬ。
丘越え 谷越え はてなき旅に、
はてなき旅に 月はいそぐ。

小酒井不木
醫學博士
小説家
名は光次
名古屋の人
昭和四年(二五九)
歿、年四十

八 勞苦と快樂

小酒井不木(據)

憂ウレシイき事コトのなほこの上につもれかし

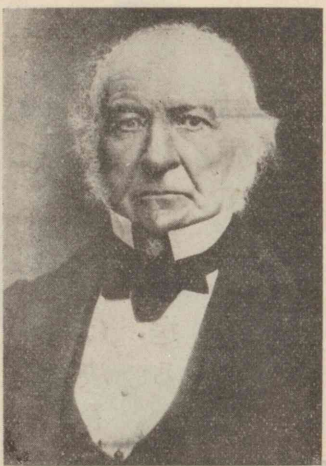
かぎりある身の力ためさん

これは古來多くの人を奮ひ起たしめた名高い古歌であるが、この歌を口ずさめば、大抵の人間は姑息なその日暮しをして居られなくなるであらう。自分の過去を振返つて、恥づかしさに堪へぬ氣持がして來るであらう。そしてまた、憂き事、苦しき事に一種の樂しみと勵みとを見出すやうにもなるであらう。

凡そ仕事と名のつく以上は、どんな仕事でも必ず苦しみ

昔から世に優れた人は、いづれも仕事をすることに無限の喜びを感じ、勞苦そのものにこの上なき幸福を感じた人であつた。

(Charlstone.
1809—1898)
第十九世紀に於ける英國の大政治家。



ンートスドッラグ

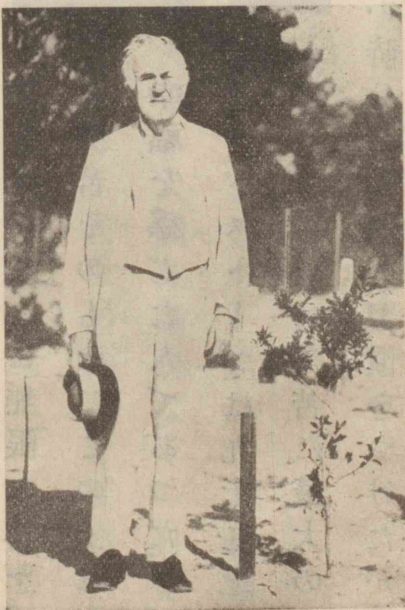
の伴なふものである。成功の秘訣は、この事實を覺悟して仕事そのものに眞の興味を見出だし、勞苦そのものに眞の愉快を覺えるにある。昔から世に優れた人は、いづれも仕事をすることに無限の喜びを感じ、勞苦そのものにこの上なき幸福を感じた人であつた。グッドストーンは九十歳近くになつて、私は勞苦に最大の幸福を發見した。私は若い時分に勤勉の習慣をつけたが、この勤勉の習慣をつけたといふその事が、勤勉に對する立派な報酬であつた。若い人は、多く休息といふことをば努力

(圖は一萬五千種の雑木雜草につき一々試験をした結果、八十二歳にして遂にゴム代用品を発見した當時のエジソン翁)

Edison.
(1847—1931)
米國の電氣學者、發明家。

を中止するといふ意義に解釋するやうであるが、私は眞の休息は一つの努力から他の努力に移ることだと思ふ。」と言つてゐるが、誠に尊い教訓である。

偉大なる人々は、決して餘生を安樂に送るために勉強するものではない。彼等は勉強することに快樂を感じるもので、随つて死ぬまで最大の努力を続けようとする。



エジソン

ことに快樂を感じるので、随つて死ぬまで最大の努力を続けようとする。エジソン翁は、「私は、一つの發明を完成すれば、もうその發明に用がない。多くの人は、發明から來る收

据ゑる
植ゑる
飢ゑる

偉人天才といはれる人には、生まれつきよりも寧ろ勤勉によつて才能を發揮したものが多し。

Santi Raphael.
(1483—1520)
文藝復興期のイタリアの畫家。
Bonnarrote
Michelangelo.
(1475—1564)
文藝復興期のイタリアの畫家、詩人、彫刻家、建築家。



ラファエッラ

入を努力に對する報酬のやうに考へるかも知れぬが、私自身は少くともさうは思はぬ。私の最大の喜は努力して仕事をすることである。」と言つたといふが、これを考へてみて

も、偉人の精神の据ゑるところを知ることが出来るであらう。

偉人天才といはれる人には、生まれつきよりも寧ろ勤勉によつて才能を發揮したものが

多い。いかによい素質を持つてゐても、捨てて置いて光る道理がないわけである。有名な畫家ラファエルを、ミケランジェロが批評して、「彼の偉大は、彼の天才よりも寧ろ彼の

勤勉に負ふところが多かつた。」と言つたのは至言である。ラファエルは僅かに三十七歳で亡くなつたが、それにも拘らず、實に二百八十七枚の繪と五百以上の素描とを残した。或人がラファエルに向つて、「どうしてこんな偉大な仕事が出来ましたか。」と尋ねたら、彼はやさしい聲で、「私は小さい時分から何事をも好い加減にしなかつたのです。」と答へたといふことである。フランスの有名な畫家ミレーも、「私は凡ての少年に向つて、たゞ働けと忠告するだけである。皆が皆、天才になることは不可能であるかも知れぬが、皆が皆仕事をすることは可能である。どんな天才でも仕事をしなければ何にもならぬ。」と言つてゐる。

Jean François Millet.

(1814—1875)

フランスの畫家。好んで農民を畫いた。その畫は文藝味、宗教味に富んだ點で名高い。

Horace Mann.
(1796—1859)
米國の教育家。

どんな職業に従事してゐても、

人といふものは、とかく他人の仕事を羨ましがらるものである。それは、どんな仕事でも、表面は樂なやうに見えるからで、隨つて他人のやつてゐる仕事に携はつてみると、始めてその苦しさはわかつて、自分のもとの仕事がこひしくなつて來るものである。若し凡ての人が、仕事を「する事」その事に快樂を感じるならば、仕事の種類は問題でなくなるであらう。だからホレースマンも、「自分の現在の仕事を嫌つて他の仕事に移る人の氣が知れない。私に取つては、仕事する事その事が魚の水に於けるやうな關係になつてゐる。」と言つてゐる。

どんな職業に従事してゐても、その職業は決して人間の

その職業は決して人間の品性を左右するものではない。それに従事する人の心の如何によつて、その職業が卑しくもなり、また尊くもなるのである。

Solomon.

(1000 B. C. 頃)

ヘブライの王。

その箴言は舊約聖書中に收めてある。

品性を左右するものではない。それに従事する人の心の如何によつて、その職業が卑しくもなり、また尊くもなるのである。また職業のために手や足を汚染することは、決してその心を汚染するのではなくして、寧ろその心を清浄ならしめるのであると言つてもよい。外見よみの穢い職業に孜孜として働いてゐる人の姿を見れば、崇高な感じこそすれ、穢いといふ感じは毛頭しないものである。だからソロモンの箴言にも、「かの事務に勤勉なる人を見ずや、彼は國王の前に立つことを得べし。」とあつて、いかに勤勉の尊いかを教へてゐる。

John Tyler.
(1790—1862)

アメリカ合衆國の大統領タイラーが、任期が満ちて退職

アメリカ合衆國
の第十代の大統
領。

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危険から遠ざからしめるものである。

すると間もなく、その政敵は彼を翻弄するつもりで、彼をその居村の測量師に選んだ。タイラーはいやがるかと思ひの外、喜んでその仕事を引受け、しかも一所懸命にこれに従事した。これにはさすがの政敵等も降参して、もういゝ加減に辭職してはいかゞですかと言ふと、タイラーは平然として、「私はどんな仕事でも引受けるが、一旦引受けた以上、決して辭職は致しません。」と返答したといふことである。

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危険から遠ざからしめるものである。「小人閑居して不善をなす。」と古言にも言つてゐるが、小人に限らず、凡て人間といふものは、ぼんやりしてゐる時に、碌な事を考へる

annui.

ものでない。犯罪學上の統計を見ても、倦怠即ちフランス語のいはゆるアンニユイが、各種の犯罪の極めて重大な原因となつてゐるのである。オーウン・フエタムは「事務の中に生長しない者は最も下劣な人間だ。」と言つてゐるが、私は寧ろ「仕事をしないものは最も危険な人間だ。」と言ひたいと思ふのである。



ンキーマ
「仕事をしないものは最も危険な人間だ。」と言ひたいと思ふのである。

何事をするにも、人はとかく仕事を早く仕遂げたいと希望するものである。謂はば成功を急ぐのであるが、これも畢竟ずるに、勤勉勞苦そのものに快樂を發見し得ないため

Charles Robert

Darwin.

(1809—1882)

イギリスの博物學者、生物進化論の創唱者。

The Deserted

Village.

Oliver Goldsmith.

(1728—1774)

アイルランドの詩人、歴史家、小説家。



で、眞に勤勉なる人は、一面からいふと頗る氣の長いものである。ダーキンは蚯蚓の研究に對して實に前後三十年を費してゐる。文豪ゴールドスマスは一日に四行づつ書けば十分だと言つて、名高い「荒村行」^{ザンギエッタウドケレージ}を書くのに前後七年を費した。しかも彼はその四行を書くのに、一日かゝつてうん／＼言つて苦しんだといふことである。

急がずは濡れざらましを旅人の

あとより晴るる野路の村雨

Edward Gibbon.
(1737—1794)
イギリスの歴史家。

といふ歌もある通り、成功を急ぐのは、決して成功をもたらず所以ではない。有名な「ローマ衰亡史」を書いたギボンはその第一章を三度書き直して始めて満足したといはれてゐるが、全篇を完成するのに、實に二十五年の歳月を費したのである。

人間はいかに努力勉強しても、若し勞苦そのものに快樂を覺えるならば、決して過勞といふ現象の生ずるものではない。過勞といふ現象の生ずるのは、成功を急ぐか、または

Henry Morton Stanley.
(1841—1904)
アフリカ探検家。

勤勉勞苦に興味を持たぬからである。それゆゑスタンレー卿も、「どんなに激しい仕事をして、確乎して規則正しく進んで行くなれば、決して身體を害ふものではない。」と言つ

てゐる。實際若し過勞のために病氣になつた人があるならば、それはその人が仕事に對する興味を少しも有たなかつた證據だといつてよいであらう。

九 仙人と石

薄田泣菫

薄田泣菫
詩人、隨筆家
名は淳介
岡山縣の人
明治十年生
張果老
玄宗（治世三）
一（一）の頃の
人。

支那の唐代に、張果老といふ仙人がありました。恆州の中條山といふところに棲んでゐて、旅をする時には、いつも驢馬に跨つて一日に數萬里の道程を往つたといひます。旅に疲れて家に歸つて休まうとでもする場合には、驢馬の首や脚をボキ／＼と折疊んで持ち運んださうです。途中に、思ひがけなく川に出水があつて徒涉りがしにくかつた

時折長い尻尾を
ふつては羽蟲を
追つてゐまし
た。



(筆山觀村下) 老果張

の脚を踏み伸ばして、もとの姿にかへつたさうです。

りすると、この仙人は手にさげた折疊み式の馬に水を吹きかけます。すると、驢馬は急に元氣づいて、曲げられた四つの脚を踏み伸ばして、もとの姿にかへつたさうです。或時、張果老が長い旅にすっかり疲れ果てて、驢馬から下りて、野中の柳の蔭で休んでゐました。驢馬はその傍でうまさうに草の葉を食べ、時折長い尻尾をふつては羽蟲を追つてゐました。すると不意に、

「おい、仙人どの、仙人どの。」

日の光はそこら
いつばいに流れ
て、廣い野原に
は自分たちの外
に、何一つ生物
の影が見えませ
んでした。

誰やら呼ぶ聲がしたので、張果老はうつら／＼する眼を開いてあたりを見廻しました。十月の静かな暖かい日の光はそこらいつばいに流れて、廣い野原には自分たちの外に、何一つ生物の影が見えませんでした。張果老はまた睡りかけようとしてました。すると、

「おい、仙人どの。仙人どのッてば。」

と、またしても自分を呼ぶらしい聲がするので、仙人は不機嫌さうに眼を覺ましました。

「誰だ？ わしを呼ぶのは？」

「わしだ。お前の前に立つてゐる石だよ。」
「なに、石だつて？」

仙人はずつと向うを見てゐた眼を急に自分の脚もとに落しました。そこには白い石が立つてゐました。仙人は氣むづかしさうに言ひました。

「お前か。さつきからわしを呼んでるのは？ わしは今睡りかけてゐるところなんだ。」

「それはすまなかつた。お前に逢つたら、是非一度訊いてみたいと思ふことがあるもんだからな。」

どこに口があるとも分らなかつたが、白い石はしつかりした聲で言ひました。

「何か。お前が訊きたいといふのは？」

「外でもない。わしは随分長くここに住んでゐて、よくお

どこに口があるとも分らなかつたが、白い石はしつかりした聲で言ひました。

五万里

約三萬三千キロ。(支那の一里は日本の六町に當る。一町は約百九メートル) 仙人は得意さうに驢馬を見返りました。馬は主人の顔を見て、にやりと笑ひました。

前が驢馬に乗つてそこいらを驅けて往くのを見るが、恐しい速さだね。」

「速い筈さ。一日に五万里を往くのだからな。」

仙人は得意さうに驢馬を見返りました。馬は主人の顔を見て、にやりと笑ひました。

「五万里！ それは驚いた。」石はびつくりして、少し肩を動かしたやうでした。

「そしてそんなに速力の出る馬を、どこから手に入れることが出来たのだ？」

張果老は仙人らしい白いあご鬚を、細い樹の枝のやうな指でしごきました。

「どこからでもない。わしが自分の法力で拵へたのだ。わしはさういふ馬を、是非一頭ほしく思つたから。」

「なぜまたそんな途方もない馬がほしくなつたのだ？」

長年同じところにじつとしてゐる石には、仙人のそんな氣持が腑に落ちないらしかつた。

「わしは幸福の棲む土地を尋ねて、方々捜し歩きたかつたからだ。」仙人は昨日見た夢を思ひ出すやうな眼つきをしました。「わしはあれに乗つて、毎日々々どこといふ當てもなく、暴風のやうに驅けずり廻つたよ。わしが尋ね残した國は、どこにもないほどだ。この原つばも今日まで幾度通つたか、覚えきれない……」

昨日見た夢を思ひ出すやうな眼つきをした。
暴風のやうに驅けずり廻つた。

待ち切れないやうに口を出しました。

「さうして、その幸福とやらはうまく見つかつたかね。」

白い石は待ち切れないやうに口を出しました。

「まだ見つからない。そしてわしはすつかり年を取つてしまつた。」仙人はかう言つて、自分の姿を今更のやうに見返りました。「鬚はこの通りに白くなるし、手は瘦せて枯木のやうに細くなつた……」

「わしは昔からずつとこゝに立つてゐるが、別段それを不仕合せだとも、退屈だとも思つたことがない。わしがお前のやうに方々飛び廻りたく思はないのは、何故だらうな。」石の言葉は他人に話すのではなく、獨語のやうでした。仙人はそれを聞くと、深く頷きました。

幸福といふものは、外にあるものぢやない。

「わしもこの頃になつて、やつとさう思ひ出したよ。幸福といふものは、外にあるものぢやない。こゝぞと思ふところろに落ちついて棲んでゐれば、始めてそこに幸福といふものが……」

「それはお前にしては出来過ぎた程の思ひつきだ。どうだい、いつそこゝに落ちついて、わしと一緒に棲んぢや。お前にしても、もう一生のつゞまりをつけてもいゝ年齢しだよ。驢馬の始末なら、明日にでも通りがかりの旅商人たが あきんどに賣り拂へばいゝぢやないか。」

白い石が無遠慮にかう言ふと、驢馬は長い耳でそれを立ち聞きして、癢かゆにさはつたらしく、いきなり後脚あとあしを上げてそ

こらを蹴散らしました。

「いや。わしにはそこまでの思ひきりが無い。人間といふものは、みんなこれまで自分のして来た仕事に引きずられて往くものだ。――あゝ、お前につかまつて、つい長話をし過ぎた。わしはもう出かけなければならぬ……」

張果老は哀しさうに言つて、自分の膝の上に落ちた砂埃を拂ひながら立ち上りました。石は見えぬ眼で、それを感づいたらしく、

「やつぱり幸福を求めて？」

「さうだ。幸福を求めて！……こんなにして方々駆けずり廻つて、やがて死ぬのが、わしの一生かも知れない。とに

人間といふものは、みんなこれまで自分のして来た仕事に引きずられて往くものだ。

かく、わしは出かけなければならぬ。

仙人は静かな足どり、驢馬のある方へ歩み寄り、馬はそれと氣づいて、元氣さうに高くいなゝきました。

「そんなら、もうお別れだ。」

張果老はひらりと驢馬の背に跨りました。そして一鞭あてたかと思ふと、馬は暴風のやうに飛んで、またく中に、廣野のはてに點のやうに小さくなりました。

「とうく、往つてしまつた。……わしはやつぱり一人ぼつちだ。」

白い石は低い聲で獨語をいつて、そのまゝ黙つてしまひました。

暴風のやうに飛んで、またく中に、點のやうに小さくなる。

……

秋の日はそろく西へ落ちかゝりました。途を間違へたらしいこがね蟲が、土をもち上げて、ひよつくりと頭を出しました。急にそれと氣づいたらしく、すぐにまた姿を隠してしまひました。

〔草木蟲魚〕

中西悟堂

詩人

石川縣金澤の人
明治二十八年生



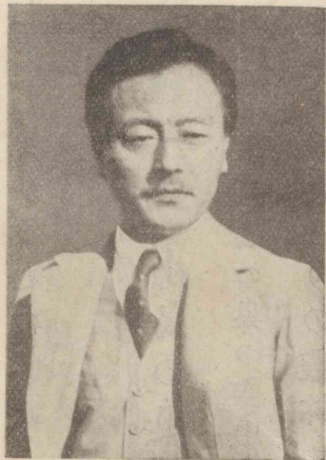
一〇 小鳥の巢二つ

中西悟堂

一 鴟の巢の空中映畫

ひとかたまりの叢林の中から梢だけを抜いてゐる檜の枝に、木屑や藁屑を組み合はせた、椀のやうな鴟の巢がある。その中には五羽の雛がゐて、母が運んでくれる餌を待ちながら、赤い咽喉を思ふ存分にあげて、チャ〜と啼き立て

いたいな。
自分の棲家の神聖なことを知つてゐる。



中 四 悟 堂

てゐる。一日に何百匹といふ昆蟲を食べずにはゐられない喰ひしん坊で、おまけに蜥蜴の頭や蛙の頭のぶつぎりを鵜呑にする呆れた子供たち。けれども私を感銘させることは、この子供たちが揃ひも揃つて清潔きれずきなことだ。どの子供も決して糞で巢をよごしたりはしない。糞をする時には、巢皿の縁にしつかりとつかまりつゝ、可愛いゝお尻を巢の外へ向けてゐる。こんないたいな雛鳥ながら、自分の棲家の神聖なことをちやんと知つてゐるのである。

鳥界切つての亂暴者。

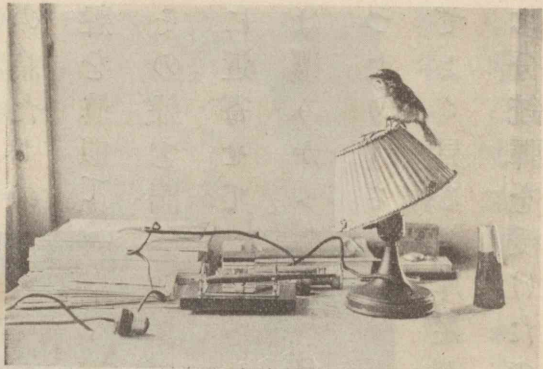
しかし私を一層感動させるのは母鳥の動作である。鵲といふ鳥は、蛙や昆蟲を尖つた木の枝に突き刺したり、ほかの鳥たちの聲を真似て、その聲を囀りに近寄せては攫みかゝつたりする。でよく見ると、片足がだらりと千切れかけて下つてゐる。多分銃弾を受けたのであらう。おまけに下腹部にはべつとりと血がにじんでゐる。弾が腹部を貫ぬいてついでに



鴉の巢 (影撮者作)

鳥界切つての亂暴者だが、それでも母としての情愛の深さには全く驚かされる。この巢に餌を運んでゐる母鳥を望遠鏡

あゝ何といふ満足さうな顔をしながら



(影撮者作) 鴉の雛

足を裂いたものであらうか。或は足から腹部へと通つたものであらうか。さすがに氣丈な鳥だけあつて、こんな重傷を負ひながらも、彼女は倦むこともなく子供のために餌を運んでゐるのである。そして子供たち、ちが口を揃へて餌をねだる時には、彼女は片足だけで巢の縁に立ち、片足はだらりと下げてゐるのに……

地上の何物よりも幸福さうに、翼を喜悅で顫はせながら、自分の愛の甘さに酔つてゐるのだ。血まみれの母の悲劇的な幸福。

Maria

るのであらう。この時の母鴉は地上の何物よりも幸福さうに、翼を喜悅で顫はせながら、自分の愛の甘さに酔つてゐるのだ。血まみれの母の悲劇的な幸福。——私は聖母マリアの像を見てゐる時よりも、もつと嚴肅な、そして幾らかは羨望に似た眼^{まなこ}眸^{まなこ}を以て、この感銘深い空中映畫を飽かず眺めてゐたのであつた。(武州御嶽にて)

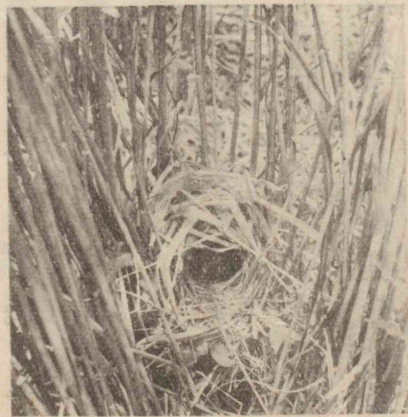
二 鶯の巢のたより

今度は鶯の巢へと足を向けよう。少しばかり足纏ひになる萱原であるが、微風は清くすが／＼しく初夏を囁いてくれてゐるし、薄紅い碇草や、青空の雫のやうな瑠璃草も咲いてゐる。

一尺
約三十センチ。

さて私は枯れた萱の穂が五六本一束にされてゐるのを見かける。それは地上一尺位のところで括られてゐるが、そこに鶯の巢があるのだ。

ほかの鳥たちの巢が丁寧に苔で縫はれてゐたり、枯枝で編まれてゐたりするのと違つて、鶯の巢はごく粗末な萱の枯葉のバラック建である。私たちが擱んだり



(影撮者作) 巢の鶯

すれば、このバラック建築は直ぐばらばらに弾き返つて壊れてしまふだらう。だがこんな粗造の巢が幾つもの卵や母鳥の重量をちゃんと支へてゐるからには、人間の考へも

人間の考へも及

Barack.

ばぬ巧みな工業。

ruby.

Egypt.

平和な信仰の母胎。

及ばぬ巧みな工業が施されてゐるのであらう。覗いて見ると、卵が三つに、もう一つ、孵りたての雛がはひつてゐる。まあ何といふ美しい赤褐色の卵であらう。紅玉ルビーのやうな、エジプトの王女の好みさうな焰の色。しかもこのやうな情熱的な色の卵から、あんな清楚な鳥が生まれるのは、ちやうど激越の情が、偶、平和な信仰の母胎となることもあるやうなものであらうか。

ついでのことにお卵を取出して掌テマに載せてみよう。幸ひ親鳥は人の訪まれに驚いてどこかへ逃げて行つてしまつた。多分あたりの叢林に隠れてゐるのであらう。三つとも卵は滑すべ々してゐて、赤瑪瑙のやうであるが、よく

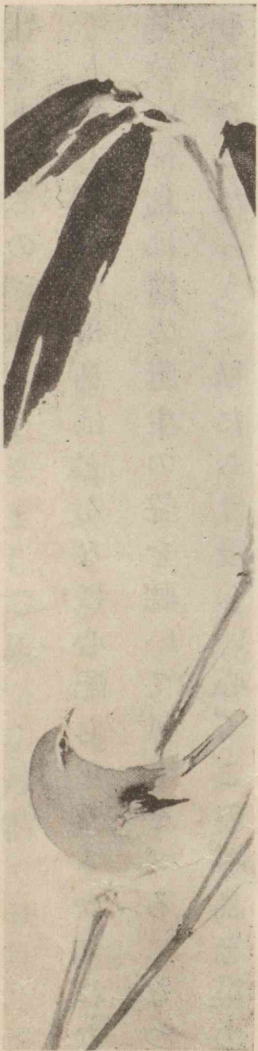
誕生の第一聲

見ると、そのうちの一つには、まん中のあたりに針で突いた程の穴がある。これは今まさに卵の中の雛が殻を破らうとする刹那に違あるまい。掌の上で孵させて見よう。見てみると、ツンと音がしてまた一つ、小さい穴があいた。そして穴はまた一つ、また一つと、前の穴に隣つて次々にふえてゆく。内から小さい嘴で順々に突き破つてゐるのである。三分間、五分間、一列の穴はとう／＼卵を横一文字にぐるりと取巻いたが、それと同時に卵は上下二つにパクリと中央から割れた。そしてどうだらう、中から小さな雛がピイピイと可愛らしい聲を立てて飛び出したではないか。その産聲は暗い世界から光の世界への誕生の第一聲であ

collinoid.

る。赤肌にはチョコボ／＼と白い毛が生えてゐる。頭にも濡れた毛がかたまつて縊れてゐる。そして何といふ愛らしさであらう、セルロイド細工のやうな赤肌の足をパタパタさせてゐるではないか。

これで私たちの地上に、輝かしい一つの生命がふえたわけだ。やがてこの雛は一ヶ月すれば翼を揃へて巣立つだ



(筆穂百福平) 鶯

らう。そして大好きな竹藪や落葉松の幼樹の枝で、地上最

も幸福な囀りの一生を送るために、歡喜の高原をそのまま棲家とするのであらう。

しかし隠れた母鳥はどんなに心配してゐるか知れない。耳敏い母鳥は雛の誕生の聲を聽いて、氣もそゞろになつてゐることだらう。私たちは優しい心でこの雛鳥を巢の中に戻して置かう。そして花と微風の申し子のやうな雛鳥と、可憐な母鶯とのために、すこやかな幸福を祈りながら、聖地を訪ねた敬虔な順禮者のやうに、そつとこの場所を立ち去らう。古代の民の懶い民謡のやうな筒鳥の聲が遠くの森から、ポポ、ポポと聞えてくる。その方角へと、また鳥行脚をつゞけて行かう。(信州輕井澤馬越原にて)

聖地を訪ねた敬虔な順禮者のやうに。

一一 元七黒七鳥

會津地方の或山里の話である。

秋の入日が茜色に山を染める時分に、林の中では片羽が白く片羽の黒い翼を持った鳥が、淋しい聲で鳴くといふ。土地の人々は、これを元七黒七鳥と呼んでゐるが、この不思議な翼と名前とを持った鳥の由來について、哀れにもまた面白い物語がある。

それは遠い昔の傳説である。人々がまだ「愚」といふ徳をもち、雞の聲に目をさまして、盈つる月、虧くる月に日並を知つた頃の話である。近い世の事ではない。

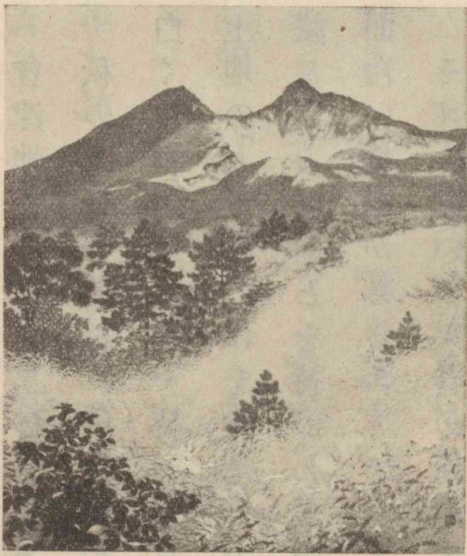
秋の入日が茜色に山を染める。

「愚」といふ徳。

盈つる月、虧くる月に日並を知つた頃の話。

その頃、この山里に獵を渡世とする一人の男がゐて、その子に元七、黒七といふ兄弟があつた。二人の母は弟の黒七

がまだ幼い時分に、この世を去つた。



會津の山里 (野口謙次郎筆)

元七、黒七の父はその後めつきりと衰へて、頬に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。日頃手馴れた半弓も、今は空しく壁にかゝつて埃の積るに任せてある。無論氣紛れに、時折弦を鳴らし

めつきりと衰へて、頬に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。

酒に映る我が顔に老の影さへ見出だしては、徒らに寂しさを増すばかりである。

がない。獨酌の盃を傾けることもあるが、酒に映る我が顔に老の影さへ見出だしては、徒らに寂しさを増すばかりである。

妻には先立たれ、獵には興を失ひ、酒にさへ寂し味を感じるやうになつては、何を樂しみにこの世に生存へよう。彼は惘然として力なくその日くを暮した。

彼はあらゆる慰安と希望とをその二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感じるやうになつた。寂しい晩年に一つの色彩を添へた。

しかし、それは暫くの間であつた。やがて、彼の眼には二人の子供の成長して行く姿が見え出した。そして彼はあらゆる慰安と希望とをその二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感じるやうになつた。この父の晩年に一つの色彩を添へたのは、その子供であつた。

一しきり彼を襲うた寂しさは、我が子の愛によつて拭ひ去られた。

父は遂に二人にはぐれた。

た。一にも子、二にも子、天にも子、地にも子、彼はもうその他を知らないやうになつた。かくして一しきり彼を襲うた寂しさは、我が子の愛によつて拭ひ去られた。磐梯おろしの吹き荒む寒い夜でも、三人が楽しく食事する爐のほとりには、紅の楷火が陽氣に燃えて、美しく暖かであつた。

かくて幾年かを過ぎて、或年の秋である。時は獵の季節に入つて、弦音が日毎にあちこちの山に響いた。年こそ若けれ、獵人の血を受けた二人が、どうして家にじつとして居られよう。彼等は父を促して打ちつれて山に入つた。二人は興に乗つて奥へくとはひつて行く。父は遂に二人

聲を限りに呼びくらしただけでも答がない。

淋しき夕日の影をあびて、ぼんやりと歸つて來た。

しんとした静けさは父の胸に絶望の暗示を與へた。

答を豫期しなかつた呼び聲は、無論空しく静かな空氣を驚かしただけである。

にはぐれた。聲を限りに谷々峰々を呼びくらしただけでも答がない。

子にはぐれた父は、淋しき夕日の影をあびて、ぼんやりと我が家に歸つて來た。見れば、我より先に人の歸つた様子が無い。しんとした静けさは忽ち父の胸に絶望の暗示を與へた。

彼は鼓動する心臓を抑へつゝ、コトリとも音のしない室に向つて慌しく子の名を呼んだ。答を豫期しなかつた呼び聲は、無論空しく静かな空氣を驚かしただけである。父の胸は益々穩かてなくなつた。彼は上り框に腰をかけて黒い足袋を片足脱ぎかけたが、ちよつとためらつて、直ぐ

身も世もなく叫びに叫んだ。

に山の方に引返した。そして廣い山の中を當てもなく歩
きながら、我が子の名を呼んだ。

「元七！ 黒七！ 元七黒七！ 元七黒七！」

彼は身も世もなく叫びに叫んだ。そして身にふりかゝ
る危険をさへ忘れて、斷崖、荆棘の嫌なく、どこまでも深入り
した。

「元七！ 黒七！ 元七黒七！」

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであらう。

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであ
らう。

その翌朝であつた。始めて降りた霜は、樺の木の下に、片
足に黒い足袋をばいて倒れてゐる老人の死骸を、白く悲し

く染めてゐた。そして傍の木枝には、片羽が黒く片羽の
白い翼を持った小鳥が、バタ／＼とさびしく羽搏きしなが
ら、痛ましい血の聲に、

「元七！ 黒七！」

と啼きつゞけに啼いてゐた。

熱心なる親心、強き愛着、烈しき煩惱が、一念小鳥と化して、長へに歸らぬ子の名を呼ぶのである。

失踪した我が子の行方を捜す熱心なる親心、身を殺して
までも子の行方を尋ねる強き愛着、烈しき煩惱が、一念小鳥
と化して、長へに歸らぬ子の名を呼ぶのである。

かくして哀しき傳説に生きる元七黒七鳥は、とこしなへ
にその哀韻を啼きつゞけることであらう。

〔趣味の傳説〕

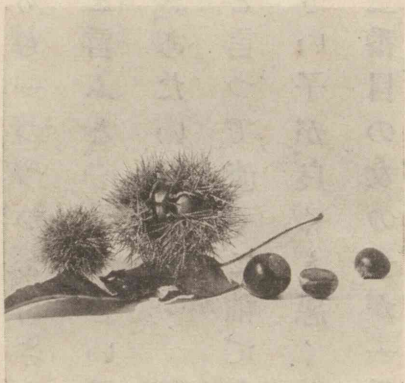
一二 茹 栗

私の友人の知合の奥さんの家庭にあつたといふ實際の話である。

或時その奥さんの家で、茹栗の御馳走があつた。有合せのを茹でたので、餘り澤山もなかつたのであらう、奥さんが茹でながら一つ二つと鹽梅見をしてゐると、茹であがる時分には大分數が減つてゐた。その家には、主人の外に四人の子供がゐた。奥さん自身を入れて六人になるのであるが、六人に分けるには餘りに數が少かつた。そこで奥さんは、お鹽梅見が少し過ぎたとは思つたものの、自分は既

犠牲獻身

に食べてゐるからとも言ひかねたのであらう、こゝが犠牲獻身の母の氣前の見せどころと、軽く考へて、
「お母さんは食べたありませんから、お前たちだけでお



「あがりなさい。」
と言つて、六つ七つづつ、主人と子供との五人に分けてやつた。主人は豫て公平を主義としてゐる人であつた。細君のこの犠牲的の行爲を黙つて見てはゐられなかつたので

あらう、直ぐに子供たちに向つて、
「お母さんは、自分が食べないでお前たちにやると言ふけ

れども、お母さんに食べさせずに我々ばかり食べてゐては、少しもおいしくありません。お父さんも出すから、お前たちも一つづつお母さんにお上げなさい。」

と言ふと、一番小さい子が、

「あたい否だ！」

と言つて直ぐに袖で自分の栗を隠した。その次に、一番大きい子が、良くも悪くもない中位なのを出した。その次に二番目の女の子が、一番旨さうなのを選つて、

「はい、上げます。」

と、静かにお母さんの前に置いた。最後の三番目の子が、

「さあ！」

茹栗一つで四人の根性がすつかり解りますからね。

懺悔話。

浄玻璃の鏡。

と言ふなり、ぼうんと蟲の喰つた奴を投げ出した。

「茹栗一つで四人の根性がすつかり解りますからね。わたしこれを見て、ほんたうに怖しくなりましたよ。」

といふのが、その奥さんの懺悔話であつた。

ひそかに物しながら、それを一かどの功名に轉化せしめようとする心。家内中同様に樂しきまうとする公平な心。

美味を獨占にしようとする利己の心。不承々々に出すお交際式の心。やるのもいま／＼しいといふ捨てばちの心。

一粒の茹栗が浄玻璃の鏡となつて、六人六様の心をうつしてゐるから面白い。

(「雲來去」)

市島春城
隨筆家
名は謙吉
新潟の人
萬延元年生

清淨で、圓滿で、
繁榮する家庭。

一三 家庭は合作の藝術品

市島春城

家庭は、人めいゝの安全地帯であり、自由郷であり、また一つの小さな國でもある。清淨で、圓滿で、繁榮する家庭は、何ものにも代へがたい優れた藝術品である。この藝術は、一朝一夕にして成るものでなく、一人二人の力で成るものでもなく、老幼男女相寄り相助くるたゆみのない努力によつて成るところの合作の藝術である。随つてこの藝術を作ることは他の藝術以上にむづかしいのである。畫を描くに、合作といふことがある。例へば、一人が山を

手法
全局。

家庭は共同精神、共同動作の必要な綜合藝術である。



市島春城

描き、一人が水を描き、一人が樹を描いて、それで纏つた一幅を成すのであるが、易いやうでそれが案外にむづかしい。合作者の意氣がしつくり投合し、手法がぴつたり合はねば畫の全局に破綻が來るからである。破綻が來ては、その畫の部分々にいかにすぐれたところがあつても、それは失敗の作だからである。

畫は本來一人で描くべきものであるが、家庭はどこまでも合作でなければ成立たない藝術である。共同精神、共同動作の必要な綜合藝術である。然らばその大切な共同精

共に憂へ、共に喜び、共に生産し、共に消費して満足する。

神、共同動作の根柢になるものは何か。それは親和である。よく親子は水入らずとか、養子や嫁は他人だなどといふ人があるが、もと／＼家庭の成立ちは他人同志なのである。まづ今こそ舅姑の立場にゐる両親でも、初は恐らく他人同志であつたであらう。それが年経る中に全く一つのものになり切つて、共に憂へ、共に喜び、共に生産し、共に消費して満足してゐるのではないか。あかの他人が水入らずになる、そこに家庭の生命があり、面白味があるのである。娘に迎へた婿、息子にとつた嫁、それらの若い人たちも、やがてはさうなるべき後進の人々である。初は他人でも、我が家庭の人となつた以上、もはや他人ではないのである。

家庭の主権者。

家庭を繁榮させるのに一番大切なのは、良い子供を生み育てるといふことである。

子供は家庭を安固に支持する支柱である。

のみならず將來は、その家庭の主権者となり、主婦となるべき大切な人々なのである。我々は家庭を重んじ、愛するところが強ければ強いだけ、深く思をこゝに致さねばならぬ。家庭を繁榮させるのに一番大切なのは、良い子供を生み育てるといふことである。夫婦が始終喧嘩をしてゐては良い子が出来ない。風波の多い家庭に、立派な子供の育つ道理がないからである。子供は家庭を安固に支持する支柱である。良い子供をまうけるためにも家庭は圓滿でなければならぬ。科学者のよくいふことだが、物が安定を保つには三點を要する。一本の棒を地上に立てても、それは仆れがちであ

鞏固。

る。二本立てて互に相倚らしめると、いくらか安定を得るが、まだ鞏固とはいへない。三本立ててお互に相倚らしむるに至つて、始めて、風が吹いても、手で打つても、めつたに仆れることのない安定を得るのである。

家庭の三點。

父と母と子、これは家庭の三點である。祖父母と父母と子供、これも家庭の三點である。父母と夫と妻、これも同じく三點である。夫と妻と、そのいづれかの兄弟姉妹、これも一種の三點と視られるであらう。しかしてこれら三點をなす三者が互に相倚り相扶けるならば、家庭の基礎がこの上ない安定を得ることはいふまでもないのである。むつかしい藝術であり、廣い世間のことでもあるから、こ

家庭といふ藝術品の中の拙作と駄作と

の家庭といふ藝術品の中には、少からず拙作もあれば駄作も交つてゐるであらうが、その中に於て、數は少くともすぐれた傑作を見るのは、見る眼に美しく、この上もない愉快である。殊にそれらの傑作が、全く一家の親和から生じてゐることを知り、その親和が、努力なくしては生まれぬものであることを思ふ時、私はさういふ藝術品に對して、心からの尊敬を捧げずにはゐられないのである。

一四 母熊子熊

相馬御風

面白い話もあればあるものである。今年、福島の山奥海拔二

相馬御風
文學者
名は昌治
新潟縣糸魚川の
人
明治十六年生
今年
昭和二年(五七)

二千尺
約六百メー
ル。

モモンガア
鼯鼠(むさしび)

犬がけたまし
く吠え出した。

千尺位の高地に五十戸程の村がある。昔から猿や熊が捕れるので名高い所であるが、或日、その村の一人の獵師が一疋の犬を連れて、夕方からモモンガア狩に出かけた。モモンガアといふ獸は、月夜に出たところを捕るもので、何でも四肢に張つてゐる膜をはたらかして、木から木へ、風のやうにフワリ／＼と飛び移つて行くのを、犬に追はせて、撃つのだといふことである。

さて、その獵師は、そのモモンガアをさがして、夕暮の薄暗がりの山中を段々に登つて行つたが、まださう高くも登らない中に、先に立つた犬が急にけたましく吠え出した。獵師は不審に思つた。「こんな淺い山にろくな獲物の居る

高が兎か狸位。

筈がない。高が兎か狸位であらう。それにしても吠え方が變だ、一體何が居るのだらう。」と、彼はあつさりとこんなことを考へながら、犬のある方へ近寄つた。



相馬御風

もう大分暗くなつてゐたので、よくは分らなかつたが、彼はそこに穴があるやうな氣がした。そして犬がその穴の入口を覗いて吠えてゐるらしく思はれた。「ははあ、こいつは狸だな。」彼はこんな獨語を言ひながら、犬を制しつゝ、その穴らしい所を覗いて見た。その瞬間に、穴の中から大きな熊が飛び出して來て、いき

瀕死の重傷。

大そらを靜かに
しろき雲はゆく
しづかにわれも
生くべくありけ
り 御風

全身血塗れにな
つて。

なり獵師に抱きついた。この餘りに思ひがけぬ突撃のため、獵師は遂に鐵砲をも山刀をも使ふことが出来なかつた。また犬の奮闘もそのかひなくして、人も犬も瀕死の重傷を負はされた。そして重傷を負うた主人と犬とは、深い

大そらを靜かに
しろき雲はゆく
しづかにわれも
生くべくありけ
り 御風

御風筆蹟

雪の中を辛うじて山を下りたが、我が家の戸口まで辿りついた時には、いづれも全身血塗れになつてゐて、やがて人事不省になつた。やがて迎へ入れた家人たちの介抱によつて、獵師だけは

犬は遂に再び起
つことが出来な
かつた。
おぼろげながら
語られた一部始
終。

見事に復讐を遂
げた。

思ひがけぬ景
品。

辛うじて蘇生したが、犬は遂に再び起つことが出来なかつた。しかし蘇生した獵師の口から、おぼろげながら語られた一部始終によつて、村人たちは一齊に奮起した。

翌朝は未明に熊狩の團體が組織された。道しるべは人と犬との血潮の痕で、彼等はやがて熊の潜んでゐる穴の口を包圍することが出来た。そして難なく熊を討ち取つて、見事に復讐を遂げた。それから村人は萬歳を三唱して威勢よく引上げようとしたが、ふと熊のゐた穴の入口に何か小さな生物のピク／＼と動いてゐるのを見出だした。よく見ると、それは生まれたばかりの小さな二匹の熊の子であつた。人々は思ひがけぬ景品を得て、再び勝鬨を上げた。

時ならぬお祭騒
にどよめいた。

死んだ親熊と生きてゐる子熊とは、やがて傷ついた獵師の家へと運ばれた。村は時ならぬお祭騒にどよめいた。それから悲壯な復讐の歡について、熊を賣つた後の樂しみについて、村人達は威勢よく語り合ひながら、獲物の周圍に集つて痛飲し、亂舞した。傷を負うた獵師は、この時既に町の醫院に運ばれてゐたのである。

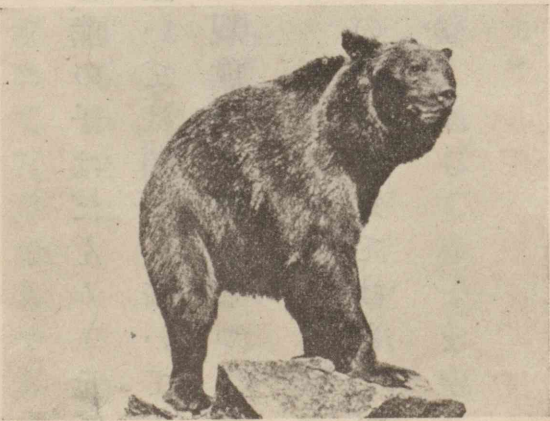
この賑かなお祭騒の眞最中に、人々は思ひがけなく異様な聲を聞いた。それは生捕にして來た子熊の啼き聲であつた。生まれたばかりの、まだ目もあかず、毛もろくに生えてゐない二匹の子熊が、その時始めて啼き聲を立てたのである。しかもその聲は、何ともいひやうのない悲しい聲であつたのである。

あつたのである。

勝ち誇つてゐた村人達は、その悲しい啼き聲によつて、始めて注意して子熊を見た。彼等は熊といふものが、非常の場合には、胎兒を生み落して身輕になり得る本能を持つてゐることを知つてゐた。

「こりやきつと月足らずの子だらうぜ。」

かういふ言葉が同時に人々の口から叫ばれた。そして直ぐあとから、



歎聲も人々の口を洩れた。

「かはいさうに！」
といふ歎聲も人々の口を洩れた。

家の中の温かさが加るにつれて、熊の子はだん／＼元氣を増して來た。そしてピク／＼動いては頻りに啼いてゐる。その傍には、血まみれになつた親熊が死骸となつて横たはつてゐるのであつた。

今まではしやいでゐた人々も、この光景を見ては、さすがに濕つた心地にならずにゐられなかつた。

「かはいさうに！」

「ほんとに、かはいさうに！」
あちこちから同じ歎息が／＼に繰返された。しま

今まではしやいでゐた人々も、この光景を見ては、さすがに濕つた心地にならずにゐられなかつた。

ひには、そのぶよく／＼した熊の子を抱き上げて、懷に入れて温めてやらうとする者さへ出て來た。

「おい、誰か、乳の出る女子をまこはゐないか。」

誰かがこんなことを言ひ出すと、聲に應じて赤子を抱へた二三人の女が出て來て、その中の一人が、わが兒を人にあづけて、手早く熊の子を抱き上げた。そしてさらに氣味わるさうな様子もなく、その熊の子に乳房をふくませた。しかし熊の子はまだ乳房をくはへることすら知らなかつた。女が變り、乳房が變つても、やはり駄目であつた。

人々は失望した。そしてせめて温めてだけでもやらうといふので、圍爐裡の傍に、藁の寢床を作り、その中へ二匹の

赤子を抱へた二三人の女が出て來て、その中の一人が、わが兒を人にあづけて、手早く熊の子を抱き上げた。

何といふ美しい、原始的な、そして意味の深い話であらう。

熊の子を入れて、代るく、手を温めては撫でてやつた。かうして一旦復讐に勝ち誇つてゐた村人達が、いつしか、自分たちのために親なしとなつた二匹の哀れな子熊をいたはり育てるために、我を忘れて働く人々となつてゐた。話の概略はこれで、東北の知人が手紙で知らせてくれたものであるが、何といふ美しい、原始的な、そして意味の深い話であらう。

面白い話もあればあるものである。

一五 冬の雪國 その一

同じく我が國土の中ながら、琉球臺灣に住む人々は雪と

彼等には嘘としか思はれまい。

いふものを知らぬ。まして雪國の冬の有様など、彼等には嘘としか思はれまい。

二尺
一尺は約三十センチ。

寒國では霜が降り出すともうそろそろ冬籠の支度に取りかゝる。庭木や果樹は丈夫な丸太を支へとして、小枝をば繩で吊して雪折を防ぎ、小さい木は板や蓆で圍つて、凍らぬやうにする。家の外側は、鴨居から二尺ほどあけて、その下は悉く板で圍ふ。障子の合はせ目には、紙を貼りつけて、吹雪を防ぐ用意をする。謂はゆる目貼で、雪圍と目貼とが濟めば、冬籠の支度はまづ整つたといつてよい。

遠山の頂に見えた雪が、次第に麓の方へ進んで来て、里に降り始めるのは、凡そ十一月の初であるが、それから積つて

積つては消え、
消えては積る。

は消え、消えては積る中に、冬至頃になると、地上の雪が、しつかり固まつて消えなくなる。これを根雪といつて、これから翌春の三月頃までは、地面を見ることがない。雪國の冬の生活は根雪から始る。

雪催ひのひどく
寒い晩。

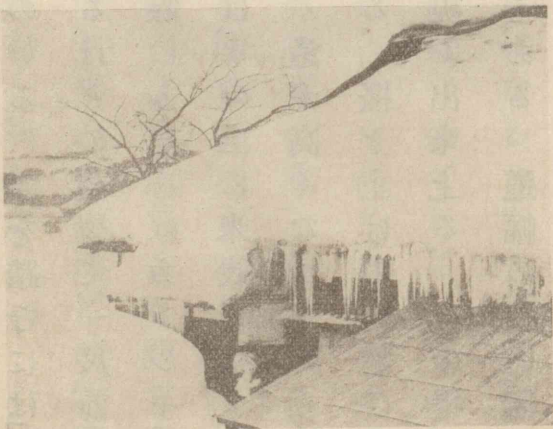
おしつけるやう
に寒くなる。

根雪となれば、あとはたゞ降るばかり、積るばかり、寒い盛りには一日に五六尺も積ることがある。雪催ひのひどく寒い晩は、よく爐に焚火して更けるまで語り合ふ。外は森として何の音もない。空は眞暗で一物も見えぬ。話の進むにつれて、おしつけるやうに寒くなる。かういふ夜が最も多く積る時で、翌る朝目を覺ますと、耳が切られるやうに冷たい。息が凍つて夜着の襟が白くな

銀モール
silver lace.

華氏の水銀が最
下の一點に縮み
込んで、ぼつち
りとも上つて居
らぬ。

つてゐる。起き出でて臺所へ行けば、屋根裏の煤や蜘蛛の網が、銀モールのやうに眞白に凍つてゐる。これを「しらぶが張る」といふ。髭にも氷柱が下る。銅盃を取れば、手について離れぬ。鍋を取れば、鉸が指に凍りつき、煙草を吸へば、煙管の吸口が唇に凍りつく。無理にはがせば、皮がむけてしまふ。窓を開けば、積雪腰を没するばかり。えらい寒さだ。寒暖計は？と見れば、華氏の水銀が最下の一點に縮み込んで、ぼつちりとも上つて



冬 の 雪 國

居らぬ。

積つた雪は踏み固め、或は拂ひのける。雪を踏むには「深沓」といふものがある。膝にかゝるほどの藁製で、一尺前後の雪にはこれで間に合ふが、二尺餘にもなればカンジキをかけねばならぬ。なほ深く積れば、その上に米俵をはき、下固めしてその上を再び固め直す。道が高くなつてからは、雪搔を以て道の兩側に搔き上げる。搔き上げるに随ひ次第に高くなつて、遂には銀のしろね高い堤が出来上る。その堤が時としては二間以上になることもある。道幅の狭い、雪の拂へぬ所では、いつまでも踏み固めるので、道路が家の軒よりも高くなる。往來へ出るには、戸口から穴を掘り、段階を

二間
一間は約百八十
センチ。

穴居生活。

つけて雪の梯子を上らねばならぬ。まるで一種の穴居生活である。

屋根の上にも雪が積る。三四尺になると下さねばならぬ。謂はゆる「雪下」で、年に三四回は普通である。下す毎に軒端の雪が益、高くなり、時には軒よりも高くなる。かやうな場合に最も人を困らすのは吹雪で、一吹き吹きすさめば、屋根の雪と地面の雪とが平らに閉ぢ合はされてしまふ。家の内は闇になる。慌てて切り開けばやがてまた閉ぢ合はず。全く人と雪との戦で、雪のやり場のない所では、雪塊を橋に積んで遠方の川に棄てねばならぬ。雪中生活で最も怖いのは、ザキといつて雪の上を走る

一吹き吹きすさ
めば、屋根の雪
と地面の雪とが
平らに閉ぢ合は
されてしまふ。

人と雪との戦。

言葉通り寐耳に水の大騒。

洪水である。幅の狭い河流は、嚴冬の真中になると、やゝもすれば氷結する。氷結した上に上流の水が堰かれ、遂には積雪の上を走つて、高窓から瀧の如く室内に注ぎ込む。寒中のしかも窓の上から落下する洪水である。言葉通り、寐耳に水の大騒で、町中總出して川筋の氷を切り開くあわたゞしさは、言葉にも筆にも盡くされぬ。

一六 冬の雪國 その二

細き大き短き長き無数の氷柱が軒から下つた状態は、研ぎすました剣を倒まに吊したやう、筍が倒まに生えたやうで。

美しいのは氷柱である。方言に金氷かまこほりともいふ。細き太き短き長き無数の氷柱が軒から下つた状態は、研ぎすました剣を倒まに吊したやう、筍が倒まに生えたやうで、それが日

水晶の簾。

二三寸

一寸は約三センチ。

大厦高樓。

光を受けて照り耀く時は、水晶の簾かとも疑はれる。長さの四五尺、わた徑の二三寸は不斷に見るところで、大厦高樓から垂れ下つた氷柱には、徑二三尺、それが大地までつゞいて、地面から生え抜いた巨柱のやうに見えるのも少くない。

子供の遊には、雪達磨、雪女房、御堂作り、坂作り、トンネル隧道作り、雪合戦など、皆取りぐに趣味はあるが、わけて楽しげなのは雪滑りである。根雪になると、車馬が廢つて橇の世の中になる。橇は雪中唯一の運搬器で、家として備へぬはない。晴天がつゞいて橇が頻りに通ると、道路の雪が磨りみがかれて鏡のやうになる。あぶないこと甚だしい。油断をすれば直ぐに轉ぶ。老人や用心深い人は、下駄足駄のうらに

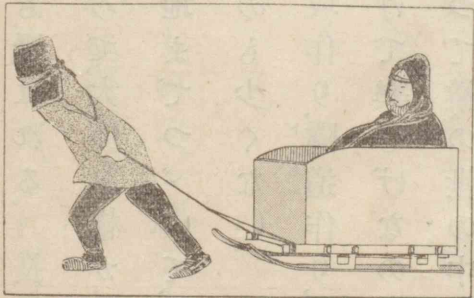
道路の雪が磨りみがかれて鏡のやうになる。

物の數でもない。

一二町
一町は約百九メ
一トル。

心ゆく遊。

釘を打ち、藁靴に鐵カンジキをつけて、おづ／＼とねらひ歩
くが、待ちかねるのは子供で、彼等は遅しと竹ボホラといふ
滑下駄をはいて、パン／＼ツウと勢よく滑り出す。橇あと
の光る所をギガといふ。二三間のギガは物の數でもない。
賑かな往來には數十間疵なしの鏡を展
べた所もあり、巧みな子供は「先よけ／＼」
と呼ばはりながら、一二町は物の見事に
一息に滑りぬく。馴れぬ者の側目には
冷汗するほど危なく見えるが、馴れた者
にはこれほど心ゆく遊はない。
寒が明いて春雨が降り出すと、積つた



と 橇

雪の嵩が減つて、どツしりと締つて来る。
この締つた雪の、夜半に凍つたのを「堅雪」と
いつて、これがまた暖國人には思ひも
よらぬものである。今までは綿の如く
柔らかで、脛を没し身を没した雪が、堅雪
になると、靴でも下駄でもぬからなくな
る。田畑も野山も、石のやうに堅くなる。
かうなると學校に通ふ子供は、田でも畑
でも見通しに一直線の近路を行く。闊
歩して、野山に魚かり、兎狩に出かける。
「かん／＼堅雪、甘いか辛いか嘗めて見ろ。」



束 装 雪

大魚小魚潑刺として氷盤の上に躍り上る。
塙 保己一
徳川時代の盲目の國學者。文政四年(一八一八)歿年七十六。

といふのが、彼等の堅雪を踏みながら唱へる文句である。堅雪時の魚の捕り方がまた面白い。小川ならば魚のゐさうな所へ行つて、上流を堰きとめる。次に目ざした場所へ雪塊を山の如く投げ込むと、水は忽ち干てしまふ。そのあとで泥を搔きわけて鯉、鮒、鱖、鯰、逃がす氣遣なく思ふまゝに生捕られる。池や堀や、湖水ならば、厚氷を渡つて、目星をつけた所に行き、鍬や鋸で氷を割つて一二尺の口をあけ、板を以て頻りに水をかい出せば、大魚小魚潑刺として氷盤の上に躍り上る。塙保己一は燈火が消えた時に目明きの不自由を憫んだといふが、雪國の者の目には、暖國の方が却つて不自由に見えるかも知れぬ。

所かはれば品もかはる。

雪國には、雪の降るにつけて、また特別の職業がある。労働者の職業は雪おろし、雪掘り、雪運び等で、彼等は雪が降らねば仕事がないところから、稼ぎ道具の雪搔に燈明を供へて、白雪大明神降らせ給へ、降らせ給へ」と祈る。所かはれば品もかはるが、どの隅でも、天の恵の到らぬところはない。

一七 旅行先よりの年始狀

遙かに年の始の御喜びを申し上げます。きつと御無事で、めでたく新年をお迎へなされたこととせう。私は父の轉地保養のお相伴をして、暮の二十五日からこの北條にま

寒になつても氷
を見ることがめ
つたにない。

海岸には松の並
木が立ちつゞい
て、砂濱の向う
には、鏡が浦の
静かな波をへだ
てて、遙かに富
士のおごそかな
影を望むことが
出来ます。

あり、海岸の木村屋といふ宿屋に泊つて、こゝで新年を迎へることになりました。大層暖かいところで、足袋をはくにも及ばない位、寒になつても氷を見ることがめつたにないと申します。

海岸には松の並木が立ちつゞいて、砂濱の向うには、鏡が浦の静かな波をへだてて、遙かに富士のおごそかな影を望むことが出来ます。木立の間にちらほらと見える田舎屋に国旗の翻つてゐるのも、珍しい眺であります。

來ました當時は一人ぼちで、淋しくつて困りましたが、段々とお友達が出来て、もう追羽子、庭球、唱歌、歌がるた、時の經つのを忘れるやうになりました。東京のお正月もさ

ぞ面白いこととせう。学校の始る前には歸京して、また面白く御一緒に遊びたいと楽しんで居ります。毎日お便りを待つて居ります。さやうなら。

一八 元 日 や

内 藤 鳴 雪

内藤鳴雪

俳人、漢學者
名は素行
愛媛縣松山の人
昭和元年(一九〇六)
歿、年八十

元日や一系の天子不二の山
流木のだぶりくくと春の川
菜の花の瞳一里や嗟峨の寺
大木の椿咲きけり山社
雀子や走りなれたる鬼瓦
古寺の廊下を通ふつばめ哉

本來空といふ
ことを
鳴雪
稻妻のあと野
山もなかりけり

若鮎の腹見せて行く淺瀬かな
木曾川は怒り木曾山は笑ふなり
大刀根の泡や流れて雲の峯
初織こゝにも日本男兒あり
二君には仕へ申さぬ紙子かな
疲れ鶉の羽たゞきもせて哀なり
三千の大衆黙して冬の嶺
夏山の城ありくと夜明けたり
初冬の竹縁なり詩仙堂
梅散りて鶉の子寒き二月かな
大菊の見事に枯れし花壇哉



内藤鳴雪筆蹟

沼田頼輔

考古學者、紋章
學者
文學博士
神奈川縣の人
明治三年生

山内侯爵家
山内一豊を祖と
する舊土佐藩主
の家。

一九 紋所の話

沼田 頼 輔(講演)

我が國では、家があれば苗字があります。そして苗字があれば必ず紋所があり、近頃は白襟黒紋附とも申す位で、禮服には必ず紋所を附けることになつて居りますが、さてその紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られてゐない場合が澤山あります。私は常にこれを遺憾として居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されて居りました頃、同家で桐の替紋を用ゐて居られることについて、理解しかねて困つたことがありました。またその後、歐洲大戦争の終らうとする時分に、大阪朝日新聞社から

Belgium.

ベルギー國王に鶴丸の紋の附いた太刀を献上する企があり、同社の海外特派員が、その紋所の由來につき邦人に尋ねたが解らなかつたため、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の

紋所の研究に没頭することになつた動機。



沼田頼輔

折の參考にしたといふことを聞き及んで、甚だ遺憾に思つたことがありました。さやうなことが動機となつて、私は紋所の研究に没頭することになりましたが、その取調に基づき、我が國の紋章が、どういふ意味で用ゐられたかといふことについて、極めて大體のお話をして見たいと思ふのであります。

紋章の起原

我が國の紋章といふものは、本來、武家時代に、或標章を旗や幕の目印として使つたのに始つたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多い。

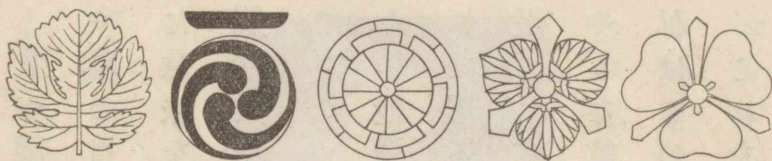
尙武的紋章

武家の旗印や幕の目印に由來する紋章。

我が國の紋章といふものは、本來、武家時代に、或標章を旗や幕の目印として使つたのに始つたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。例へば劍^{けん}酢^か漿^た草^{ばみ}、劍^{けん}葵^{あひ}、劍^{けん}桔^か梗^{げい}などいつて、劍を花の間に取合はせてゐるのがそれで、そのみならず兜の^{かぶ}鍬^{がた}形^{がた}や、^{あひ}總^{まき}角^{まき}や、^{ほい}脛^だ楯^だや、その他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉く紋所に用ゐられて居るといつてもよいのであります。但しかういふ武張つた紋所は多く武家に用ゐられたので、お公家衆にはかやうな紋所を用ゐてゐるのが少しもありません。それ故私はこの種類の紋所を、尙武的紋章と申して居ります。これを第一種として、第二種は、戦争の際の功名手柄を後

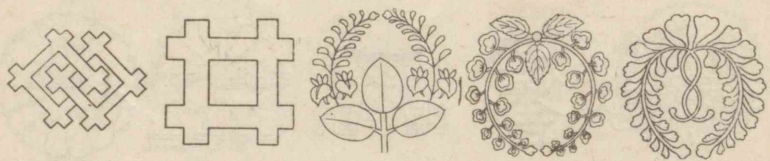
記念的紋章
戦争の際の功名
手柄を後世に傳
へるために作つ
た紋章。

徳富蘇峰
文學者、歴史家。
名は猪一郎。熊
本の人。文久三
年生。



梶戸平 紋の須那 車氏源 葵劍三 草漿酢劍

世に傳へるために作つた紋章で、私はこれを記
念的紋章と名づけて居ります。例へば徳富蘇
峰氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が畫かれ
てあります。八角といふのは、隅切の折敷と申
して、神様に供物を上げる時に用ゐるものであ
ります。が、徳富氏のお話に依りますと、氏の御先
祖の方が、天草の戦争の折に敵の大將の首を取
られ、これを首實驗に供するため、隅切折敷に
載せて大將の見參に備へられたことがあつた、
それに因んでこの紋所を作られたといふこと
で、巴は昔から一つ頭、二つ頭などと呼んだもの



筒井遠 筒井 藤り上 藤藤内 藤條九

です。から、これを敵將の首に擬へ、折敷に組み合
はせて、新しい紋所を組み立てたといふことは、
いかにも武家に相應はしい話であります。か
ういふ種類の紋所は他にも澤山あつて、例へば
關ヶ原の合戦に、土佐の檉井といふ士が、敵將の
首を取つた記念に、生首を紋所にしたといふ例
もありました。源平屋島の戦に那須與一が平
家の扇を射落した、その晴れやかな功名を偲ぶ
ために、その子孫の中には、日の丸の扇を紋所に
用ゐてゐるものがあるといふ事でありませぬ。
第三種は私が指示的紋章と名づけてゐるも

指示的紋章
苗字に因んだ紋章

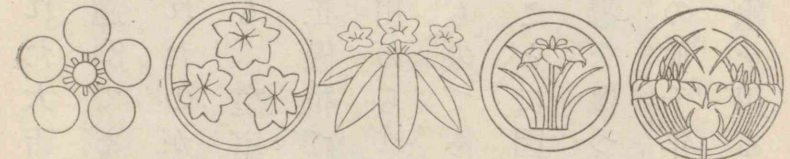


桐五七 ね重字の大 字のみに居鳥 水 菊 (菊院相實) 菊重

ので概して苗字に因んだものであります。例へば吉野といふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井などいふ井の字の附く苗字の者が井の字、或は井桁、井筒などを用ゐる類で、これらはその紋所を見て、これが何家の紋所かといふことがすぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤、遠藤、伊藤、佐藤、加藤、工藤、内藤などいふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ゐてゐるのも、この種類に屬します。藤の紋所については藤原氏から出た家が用ゐるといふやうな説もありますが、全くの誤で、そ

雲上明覽
紋章の書。天保八年(同巻)の刊行で、編者不詳。

瑞祥的紋章
めでたいことに因んだ紋章。



鉢梅實瓜 楓三 膽龍 若杜立 若杜抱

れは、雲上明覽といふ書物に據ると、藤原氏から出た公家が總計九十七軒あつて、その中藤の紋を用ゐてゐるものが僅か七家だけであるのを見てもわかります。第四種は瑞祥的紋章ともいふべきものであります。これは息災延命、福德圓滿、子孫繁昌など、俗にいふ縁起のよい事に因んで工夫されたもので、大別すると文字と繪模様との二いろいろあり、文字の方では、指事の意義を離れて、天、長、大、福、吉、利等の目出たい文字を用ゐたのは、すべてこれに屬します。石田氏、山内氏などに用ゐら

菊花の御紋章は
瑞祥中の瑞祥。

重陽の嘉節

陰曆九月九日の
菊の節句。九は
陽數の最上位で
九月九日はその
陽數の重複であ
る。

れた大吉、大い、大万の六字を寄せ集めた紋章などはその最
適例でありませう。繪模様の方も同じく指事の意義を離
れたのが皆これに屬するので、その第一に擧ぐべきは、畏く
も 皇室の御紋章の菊花であります。これは花の姿が端
正優雅で氣品が高い上に、延命の瑞草として重陽の嘉節に
用ゐられるのに因んだので、誠に瑞祥中の瑞祥と申すべき
ものであります。また桐の紋はこの木に靈鳥鳳凰が棲む
ことに因んだのであり、楠氏の菊水は、菊の下水したみづを掬んで長
壽を保つといふ支那の古傳説に據つたのであります。そ
の他、千年の齡にあやかると意で鶴を用ゐ、萬歳の壽を祝つて
龜を用ゐるなど、その數の多いことは、さすがに縁起を好む

菊

(酒井抱一筆)



菊

圖は、その外の名は無くもがたと歌はれた白菊黄菊に紅の一種を加へたもの、まだ菊作りのわざとらしい人工を加へられぬ自然味の小輪群を、權門に生まれながら世を捨てて風流道に遁れ入つた天才畫家酒井抱一上人が畫いたのである。

抱一上人、幼名は榮八、諱は忠因、寶曆十一年の生まれで、播州姫路城主酒井雅樂頭忠次の弟である。生まれつき不羈自由を愛し、殊に藝術の天賦に秀で、年三十七の時病と稱して京都西本願寺に入り、文如上人の弟子となつたが、後文化六年には江戸に歸つて根岸の里に隱栖し、その居を雨華庵と名づけ、それより文政十一年(西暦元年六十八歳)にして歿するまで引きつゞき氣品の高い風流の生活を送つた。

上人の畫の系統は、狩野、浮世繪、土佐、圓山の諸流派を併せ究めてそれらの風格を取入れたが、特に尾形光琳の畫風に傾倒し、金錢に不自由のない處から、光琳の作品を聚集し、臨摸に努めて、その蘊奥を極めた。東京帝室博物館所藏の着色花卉畫卷は上人の代表作を集めてあるといはれるが、この菊の圖もそれらの群に入るべき名作である。

人間の心理を現して居ります。

第五種は尙美的紋章で、これは多くお公家さんの家に用ゐられました。お公家さんには家によつて、衣裳や車などの裝飾に、代々極つて用ゐられた文様がありました。それがそれを紋所にしたのがこれです。例へば、花山院家の杜若、今出川家の楓、或は久我家の龍膽の如きは、いづれも車や着物の文様として用ゐられたものが、後世紋所が行はれるやうになつてから、その方面に轉用されたものであります。これらの紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて

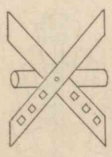
尙美的紋章
公家の家々にて
裝飾に用ゐた文
様を紋所にした
もの。



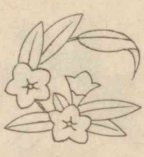
鶴



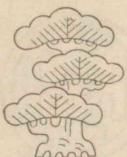
蝶の羽揚



木魚勝木干



龍膽



松蓋三

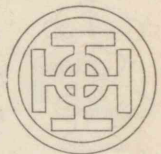
信仰的紋章
信仰の意味から
用ゐた紋章。

Christ.

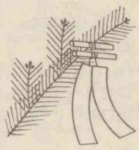
CROSS.
十字架。

中川清秀

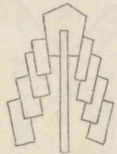
信長に仕へた武
將。天正十年
(三三)戦死、年
四十二。



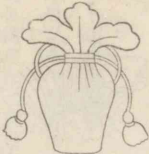
スル川中



守園祇



幣一



子瓶一



紋字有

用ゐる始められたものでありますから、尙美的紋章といふべきもので、それは概して文様から移つて來たものであります。第六種は信仰の意味から用ゐられたもの、即ち信仰的紋章ともいふべきもので、これには随分澤山の種類があります。例へば戦國時代にハキリスト教が盛んに行はれたので、この教を信ずる者は、多くクロススを紋所と致しました。その一例を挙げると、有名な賤ヶ岳の三振太刀の一人中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者でありました。それ故、その子孫は、今でも中

patent cross.

Andrew cross.

川クルス」と稱して、パテント・クルスといふものを用ゐて居ります。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は祇園守といふ紋所を用ゐて居りますが、これはキリスト教のアンドリユー・クルスから出たものであります。御承知の如く島原の亂以來、キリスト教は嚴しい國禁となつて、これを信ずるものは、大名でも、士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召し上げられるといふやうなことになつて、この教に關係のあるものは、片端からその影を潜めましたが、それにも拘らず、戦國時代にキリスト教を信じた大名の子孫は、大抵クロスス系統の紋を用ゐて居りました。

信仰的紋章の中では、神様に關係したものが比較的澤山

趙州無字

禪宗公案の一。唐の趙州觀音院從諗禪師が或僧から「狗子に佛性ありや」と問はれた時「無」と答へた。これは有無を超越した無であつて、こゝに意味深長な禪の奥義があるといはれ、有名な話になつてゐる。

神社にも社紋といつて極つた紋所を用ゐてゐるのがある。

あります。例へば鳥居、瑞籬、欄干、御幣、額、瓶子、千木、鯉木など、苟も神社に關係のあるものは概ね紋所に用ゐられて、さすがに日本は神の國だと思はれます。これに反して佛教關係の紋所は多くありませんが、これは神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに本づくのであります。仙子爵の紋所が「無」の字を用ゐてゐるのは、禪宗の「趙州無字」といふ故事から來たので、少い例の一つであります。

我々の家に紋所があるやうに、神社にもまた社紋といつて、極つた紋所を用ゐてゐるのがあります。例へば、天満宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶の葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の龜甲に「有」の字の紋の如きが、それでありませう。出雲で

大國主尊

素盞鳴尊の御子。また御孫ともいひ、出雲大社の祭神。大己貴神、八千矛神、國造大神ともいはれる。

「有」の字を用ゐるのは、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主尊が杵築に鎮座せられたのが十月であつたといふので、この月を鎮座月と申して居りますが、十月の二字を組み合はせると「有」の字になるので、それを社紋に定めたのであると申します。

とにかく我が國では、家にも神社にも定まつた紋章があつて、それに歴史的、精神的の重大なる意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面の關係學に取つて大切であるばかりでなく、これについて一通りの知識と趣味とを持つことは、修養ある國民の一種の嗜みともいふべきであります。

齋藤茂吉

歌人

東京青山腦病院

長

醫學博士

山形縣の人

明治十五年生

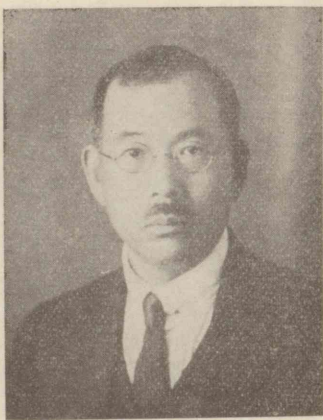
spectrum.

二〇 スペクトラ

齋藤茂吉

寺子屋がなくなつて、形ばかりの小學校が村にも出来るやうになつた。教員は概ね士族の若者であつた。中には中年の者もゐた。「究理の學」といふことが、時々それらの教員の口から強調して言ひ出された。その頃、父が冬の藁仕事の際に或教員の所へ遊びに行くと、今届いたばかりだといふ三稜鏡を見せられた。「太陽光といふものは、この通り七綾の光から出来てゐる。虹の立つのはつまりそれだ。洋語ではこれをスペクトラといつて、七つの綾の光といふことである。舊弊ものは來迎の光などといふが、あれは木

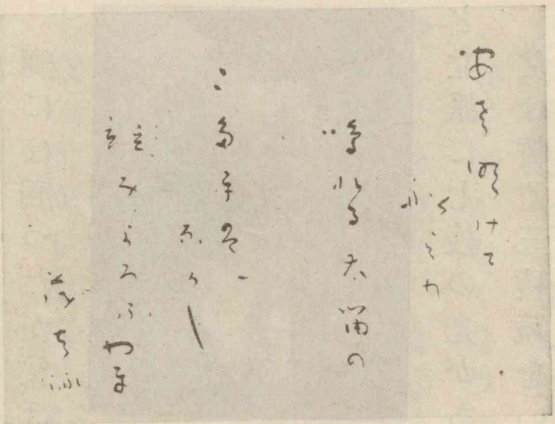
教員は神信心深い父の前で、恰も無人の境を行くが如くに氣を吐いた。



齋藤茂吉

偶法印に食はされてゐるのだ。」教員は神信心深い父の前で、恰も無人の境を行くが如くに氣を吐いた。癩には觸つたが、父は爲なん術なく、切りきりにその三稜鏡をいぢつてゐた。それは、何かの仕掛はないか、からくりはないかと思つたからであつた。が、ちつともさういふ氣配が見えない。そして太陽光を透とほして見ると、なるほど、立派に七綾の光があらはれる。父は暫く三稜鏡をいぢつてゐたが、ふとそれを以て爐の火を覗いた。すると、意外にも、爐の中の炎がやはり七つの

あさ明けて船より鳴れる太笛のこだまは長し並みよろふ山
 茂吉詠
 あんまいな
 あるまいな
 ほれから
 それから
 皆山形地方の方
 言
 お天道様も、ほれから、圍爐裏のおきも、同じに見えるが、物體なくはないか。



藤 齋 茂 吉 筆 蹟

綾になつて見える。父は忽ち胸に動悸をさせながら、これは、きりしたん伴天連てんてんの爲業であるから、念力でなんとかしなければならぬと思つたさうである。

「教師様。お前は、きりしたん伴天連にだまされてゐるんではあんなまいな。これを見さつしやい。お天道さまも、ほれから、圍爐裏のおきも、同じに見えるが、物體なくはないか。からくりが見えないやうにしてこの中に有るに違ないな。きりしたん伴天連！ おれの念力でなくな

父は三稜鏡をいきなり爐の炎の中に投げ込んだ。

大山 巖
 日露戦役（二五至二五五）に於ける我が滿洲軍總司令官。陸軍大將、元帥、公爵。
 大正三年（二五四）
 歿、年七十三。

れ！」

かう言つて、父は三稜鏡をいきなり爐の炎の中に投げ込んだ。教員は驚き慌ててそれを拾つたが、忿怒することを罷めて、やはり父がしたやうに、爐の炎を、暫くの間三稜鏡で眺めてゐた。教員には日輪と爐の焚火と同じものであるか、違ふものであるかの判断がつかなくかつた。教員の究理の學はこゝで動搖した。父は、滿洲から歸つて來た大山巖のやうな氣持で、そこを引上げた。

後年父はしばしその話をした。そして開化文明の學問をした教員を負かしたといふことに非常な得意を感じてゐた。けれども單にそれのみではなかつたであらう。

神の本願力を念じて、穀斷ち、鹽斷ちをしてゐたやうな父に、スペクトラの實驗が腑に落ちよう筈がない。

還曆を過ぎ、古稀をも過ぎた。

雲右衛門

桃中軒。明治末期の有名な浪花節語り。大正五年(三五六)歿、年四十四。

意識の上のぼつて來なかつたであらう。

神の本願力を念じて、穀斷ち、鹽斷ちをしてゐたやうな父に、スペクトラの實驗がすぐさま腑に落ちよう筈がなく、そして父の心持が、腑に落ちるなどといふよりは、寧ろ、反撥したといつた方がいゝかも知れないからである。

それからずつと月日が経つて、父は還曆を過ぎ、古稀をも過ぎた。その頃父は上山町のとある店先で、感に堪へぬといふ風で、蓄音機のラツパから傳はつてくる雲右衛門の浪花節を聞いてゐたことがある。けれども、父はその蓄音機が、究理の學に本づくものだといふことなどを追尋しようとしなかつた。曾てスペクトラを退治した光景なども、無論意識の上のぼつて來なかつたであらう。(「念珠集」)

二 小さい仕事の大きな意味

羽仁もと子

私どもは一體どのやうな標準によつて名々の一生を營んでよいものでせうか。

或所に郵便局に勤めてゐる一人の男がありました。毎日の仕事は多くの郵便物にパタン／＼とスタンプを押すことでした。男は生活の必要から、かういふ事をしてゐるものの、夏の暑い日などはすつかりその單調な音に厭き果ててしまひました。いやで／＼ならないけれども、食はずにはゐられませんから、仕方なしにしてゐると、押した筈のスタンプがつい押しもらしてあつたりして、随分不成績な

羽仁もと子
教育家
自由學園長
「婦人之友」主筆
東京府の人

stamps

行き届いた郵便制度。

post.

勤めぶりをつゞけてゐました。その中に或日のこと、小学校の同窓會があつて、それに出席して見ると、同じ會員の中に、役こそ違へ、或大きな郵便局に勤務して、かなり出世をしてゐる人があつて、その人が「郵便」に關する講演をしました。その人は、多くのポストに思ひ思ひに投げ込まれた郵便物が、區域々々に時も違へず集められ、一定の順序でスタンプが押され、それがそれ／＼に區分されて、正確に手順よく配達されて行くことを、實に面白く話しました。さうしてこの行き届いた郵便制度から社



子とも仁羽

會全體が實に廣大なお蔭を蒙つてゐるといふことで、話が結ばれました。

毎日々々いや／＼ながら已むを得ずスタンプ押をしてゐたその人は、これを聞いて、自分のしてゐる單調な小さな仕事も、成程このやうな大きな仕事の肝要な一部分を成してゐるのかと、始めて心づきました。さうしてそれと同時に、自分のとかく不成績がちな勤めぶりに思ひ及して、自分はその大きな立派な事業の賊であつたやうな氣がしました。さうしてその上に、萬一自分のやうなものが他に幾人もあるとしたら、この大切な仕事の見事な手順も系統も狂つてしまふであらうと氣がついて、愕然としました。

事業の賊。

毎朝輝く希望を以て家を出る。

生活のために使役される。

あくる日から、この人の仕事に對する態度は、ひとりでに變つたものになりました。それは自分のしてゐる仕事を理解し、自分の受持の小さな領分も、十分に意味のある大切なものであることを悟つたからでした。この人はそれ以來、毎朝輝く希望を以て家を出るやうになりました。同じスタンブ押の仕事をも、パンを得るための仕事ではなく、國家社會に於ける重要な任務の一部を擔當してゐるものと考へるやうになつたのです。生活のために使役されてゐた以前と違つて、自分の生活を分相應な意味のある仕事に使つてゆくべきだと氣づいたのです。すると仕事の成績も以前に較べて非常によくなつて、はたの人達もこの人

の眞面目な働きぶりに心づくやうになり、昇給から昇進と位置は次第に進みました。そして今は幾人かの部下を使ふべき身となり、常にそれらの人達にこの經驗を話して、諭してゐるといふことです。

二二 雛人形

西澤 笛 畝

西澤笛畝
畫家
人形研究家
名は昂一
東京の人
明治二十二年生

近頃は、節分の豆まきが濟むか濟まぬに、早くも雛人形賣出しの聲を聞く。しかもこの人形行事が年を逐うて盛大に赴くことは驚くばかりで、新考案に成る珍しい雛の數々が、年一年に取材の妙を誇り、新奇を競ふといふ有様である。この古俗の復活發展はまことに悦ぶべき流行ではあるが、

しかしながら餘りに新奇を競うて、雛そのものの本質を没却したもののや、品位のない際物きほんものを作ることは避けたいものと思ふ。

元來雛は、我々人間の雛形で、小さいながら人間に似寄つたその雛形が、本尊の人間に代つてすべての災厄を引受けてくれるといふ、大切な役目を持つてゐるのであつた。そしてかやうな深い意味を持つてゐるだけ、その製作には特に敬虔な心を以てしたものである。一體大昔の雛は、男も女も殆ど同形のものであつたが、人智の進むに



西澤 笛 畝

敬虔な心。

松の剛と藤の花の柔とを以てそれぞれに男女の特性を現し、日本婦人の特殊な性情を表現する。

つれて、男は男らしく、女は女らしくといふ自然の要求から、段々性別の特色を現すやうになり、それが次第に精巧に赴いて、遂に今日謂ふ立雛たちひなが出現したのである。また並べ方も、古くは別に男女を一組にすると限つたわけではなく、姉様人形などと同じやうに、必要に応じて自由に造り出されたものであつた。またこれを飾る季節についても、今日はやうに三月三日に限るといふのではなく、時に應じ折に觸れて飾られ祭られてゐたのであつた。

立雛の模様には、一番多く松と藤の花とがあしらはれてゐる。これは松の剛と藤の花の柔とを以てそれ〴〵に男女の特性を現したので、松によりそふ藤の花といふ風情に

よつて、日本婦人の特殊な性情を表現したのであつた。また袴につけた菊の模様は、延命の花のゆかりを利かせたものといはれてゐる。いづれにしてもその配合の美しく優雅なところは、考案者の趣味の高さと技術の冴えとを示したものであつた。

しかしこの立雛もいつしか満足されぬやうになつてもつと本物の人間に近い形のもを得たいといふ要求が次第に起つて來た。この要求の具體化されたのが足利時代の末期からで、室町雛と稱する、袖を張つて端坐した姿のや、吉野雛と呼ぶ神像風に立つてゐるものなどが、この期に出て、立雛と座雛との中間に位する推移期を代表した。

足利時代は立雛から座雛に移る推移期。

徳川時代には雛祭の先驅をなす雛遊が盛んに行はれ出して來た。

享保雛は雛人形としての形式を完全に備へた第一歩の實例。

その中に時勢が一轉して徳川時代となり、四海波靜かにして四民が平和な生活を樂しむやうになると、雛祭の先驅をなす謂はゆる雛遊が盛んに行はれ出して來た。その雛遊に飾られて主位を占めたのが謂はゆる座雛で、寛永雛は、その最も古いものであり、同時に今日に残存する古雛の中でも殊に貴重なものである。

寛永の頃からは段々と雛の新考案、新製作が試みられて世人を喜ばし、次第に今日の隆盛を來したのであるが、享保頃には謂はゆる享保雛が作り出されて、雛人形としての一種の形式を完全に備へた第一歩の實例が示された。享保雛は、綿密な考證によつて姿貌の十分に整へられた非常に

優雅なもので、いづれの點から見ても極めて尊重すべきものである。

その頃次郎左衛門といふ名工が出たが、彼の作にかゝる立雛、座雛は、いづれも趣味の高雅なもので、衣裳の着附などには殊によく注意して、後代の模範とすべきものであつた。殊にこの人形の特徴は、顔面の丸く豊かに、しかもかの藤原期の扇面、古寫經等に見る引目、鈎鼻ひきめ かのばなといふ温雅な風格を有つてゐる點で、これは當時専ら行はれた寫生風の顔面製作法に比して一段の味はひを發揮してゐるものである。

それから下つて文化文政期の頃になると、雛人形の上にも段々と寫生味が加つて、顔面も表情的になつて來たが、天

文化文政期には雛人形に寫生味が加り、天保頃には更に多く自

雛人形いろく (西澤笛畝藏並びに選)

吉野雛

(足利時代)

次郎左衛門雛
(享保時代)

立雛

(徳川政時代)

古雛
(室町時代)

優雅なもので、いづれの點から見ても極めて尊重すべきものである。

その頃次郎左衛門といふ名工が出たが、彼の作にかゝる立雛、座雛は、いづれも趣味の高雅なもので、衣裳の着附などには殊によく注意して、後代の模範とすべきものであつた。殊にこの人形の特徴は、顔面の丸く豊かに、しかもかの藤原期の扇面古寫經等に見る引目、鈎鼻ひきめ かのばなといふ温雅な風格を有つてゐる點で、これは當時専ら行はれた寫生風の顔面製作法に比して一段の味はひを發揮してゐるものである。

文化文政期には雛人形に寫生味が加り、天保頃には更に多く自

それから下つて文化文政期の頃になると、雛人形の上にも段々と寫生味が加つて、顔面も表情的になつて來たが、天

雛人形 いろく



吉野雛



西澤笛藏並びに選



次郎左衛門 雛
(享保時代)



立雛
徳川時代



古雛
(室町時代)



優雅なもので、いづれの點から見ても極めて尊重すべきものである。

(文政期 川柳)

その頃次郎左衛門といふ名工が出たが、彼の作にかゝる雛座雛は、いづれも趣味の高雅なもので、衣裳の着附など、殊によく注意して、後代の模範とすべし。この人形の特徴は、顔面の丸く豊かに、しかもかの藤原期の扇面古寫經等、風見雛目、鉤鼻といふ温雅な風格を有つてゐる點で、これは當時専ら行はれた寫生風の顔面製作法に比して一段の味はひを發揮してゐるものである。それから下つて文化文政期の頃になると雛人形の上にも段々と寫生味が加つて、顔面も表情的になつて來たが、天

文化文政期には雛人形に寫生味が加り、天保頃には更に多く自



然味が取入れられた。

保頃には更に多く自然味を取入れ、在來の描目びまめに對して、玉目細工を應用するまでに變つて來た。同時に雛飾の形式の上にも年一年と複雑味を加へ、雛の外に謂はゆる御道具類を數多く添へることになつて來た。

それから明治で、あの維新の大變動につれて、さしも盛んであつた人形祭の風流行事も一時は殆ど姿を消して、立派な雛人形が二束三文に賣り捨てられる悲運に遭遇したが、二十年頃から、國粹保存主義の勃興につれて、五節句復活論が唱へられ、その影響を受けて、雛祭の風雅な遊がまづ人に思ひ出されるやうになつた。かくして最初に芽を吹いたのが三月の節句の雛で、これが昔以上に少女たちから



二十七八年戰役
日清戰爭(三五四
三五五)

可愛い工藝人形
が國交上の大使
命を遂行する。

川路柳虹
詩人、畫家
名は誠
淡路の人
明治二十一年生

可愛がられ、續いて二十七八年戰役の大捷が男の子の人形祭である五月の節句の復活を喚び起して、二つともに昔に劣らぬ盛大を見るやうになつた。のみならず今日では、日本の雛祭が、一躍世界的のものとなり、青い眼の人形が我が雛段に飾られ、黒い眼の人形が歐米に渡つて、あの可愛い工藝人形が國交上の大使命を遂行するやうになつたのは、實に愉快な現象といはなければならぬ。

二三 笑ひごゑ

なんといふいのちだ、
なんといふ生き生きとしたことだ、

川路柳虹

母はそのかかへた手に
波うつた笑をかかへる。

母の腕かみでに抱かれた
嬰兒あかこの充ち満ちた笑よ。



虹柳路川

母はそのかかへた手に
波うつた笑をかかへる、
全世界にひびくやうな幸福を
その笑ひごゑに聞くのだ。

朝の日は向うの屋根を飛びこえて
一めんに母の顔にあたる、髪にあたる、
嬰兒の頭かぶにあたる。

その笑は金色をなして波うつ、
母にも、嬰兒にも、
そしてそれを見る自分にも。

二四 愛犬ボチ

長谷川二葉亭

嬉し^いにつけ、悲し^いにつけ、憶ひ出すのはボチのことだ。
春雨のしとくと降る薄ら寒い或夜のことであつた。
私は例の通り宵の口から寐てしまつたが、ふと目を覺ます
と、耳元近くに妙な音がする。ゴウといふかとするれば、スウ
と、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大
鋸で大丸太を挽き割るやうな音だ。

長谷川二葉亭
明治の小説家
名は辰之助
名古屋の人
明治四十二年
三月に歿、年四
十八

大鋸で大丸太を
挽き割るやうな
音だ。

宵の口から寐て
しまふ。

囃子の手が込ん
で來て。

手に取るやうに
聞える。



私は夜中に滅多に目を覺ましたことがないから、初はひ
どくびつくりしたが、能く研究してみると、なに、父のいびき囃子の
で、やつと安心して、そのまゝ再び眠らうとしたが、どうもそ
れが耳について寐つかれな
い。仕方がないから、聞える
まゝにその音に聴き入つて
ると、いつからとなく囃子
の手が込んで來て、合の手に
遠くで微かにキャン／＼と
いふやうな音が聞える。囃子が凄じい時には、それに氣壓さ
れて聞えぬが、囃子が低くなるとはつきりと手に取るやうに

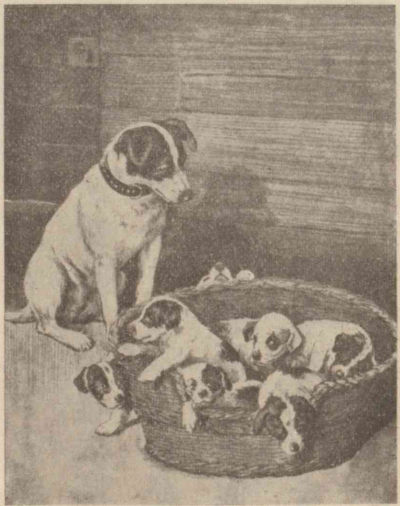
聞える、不思議に思つて益、耳を澄ましてゐると、次第に大きく、高くなつて、遂には鼾とは離れぐに確かに門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼き聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けたましくキャン／＼と啼き立てる、その聲尻がやがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い／＼所へ消えて行く、かと思すれば、忽ちまた近くで、堪へ切れぬやうに啼き出して、クン／＼と鼻を鳴らすやうな時もあり、ギャオと欠伸をするやうな時もある。

「私はそつと夜着の中から首を出して、
「小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう？」

聲尻がやがてか
ぼそく悲しげに
なつて、めいる
やうに遠い／＼
所へ消えて行
く。

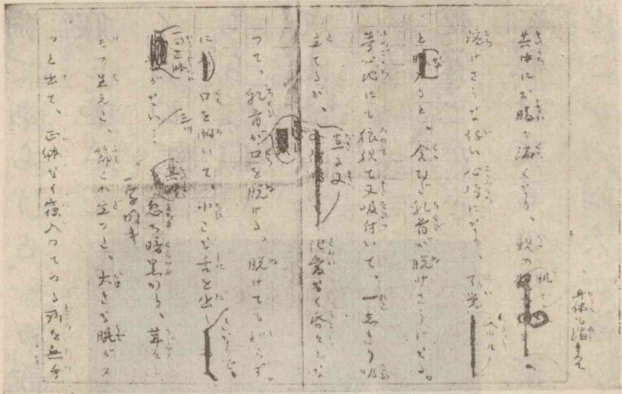
と、うるさく母にきくと、母はやさしくどこかの人が棄てた
狗であらうと、一々説明してくれて、もう晚いから黙つてお
寐。」とやさしく言つて、あ
ちらを向いてしまつた。



私もまた
夜着をかぶ
に、私は夜着の中で棄狗の有様を繰返し／＼考へた。まづ
どこかの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。ちつぽけな、
むく／＼したのが、重なり合つて首を擡げて乳房を探して

つた。狗は門前を
去つたのか、啼き聲
がや／＼遠くなるに
つれて、父の鼾がま
たうるさく耳につ
く。寐られぬま／＼

ドサリと横になる。コロ／＼と轉がる。ヨチヨチと這ひ寄る。
小さいから舌の先でたあいもなくコロ／＼と轉がされる。



長谷川 二葉 亭筆蹟 (平凡原稿)

ゐるところへ、親犬が餘所から歸つて來て、その側へドサリと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから舌の先でたあいもなくコロ／＼と轉がされる。轉がされては大騒して起き返り、またヨチ／＼と這ひ寄つて、ポツチリと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわてて吸ひついて、小さな兩手で揉み立て揉み立て吸ひ出すと、甘い温かな乳汁が出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何ともいへずお

鼻面で割り込んで來る。

お腹もくちくなり。

ついうと／＼となると、含んだ乳首が脱けさうになる。

忽ち暗闇から大きな腕がヌツと出て、正體なく寐入つてゐると

いしい。と、腋の下からまだ乳首に有りつかぬ兄弟が鼻面で割り込んで來る。取られまいとして、産毛の生えた腕を突張り大騒やつてみるが、とう／＼取られてしまひ、またそこらを探ねて他の乳首に吸ひつく。そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、溶けさうな好い心持になり、ついうと／＼となると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわててまた吸ひついて、一しきり吸ひ立てるが、ぢきにまたたあいなくうと／＼となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。その時忽ち暗闇から大きな腕がヌツと出て、正體なく寐入つてゐるところを無手と引つ

ころを無手と引
つ掴み、宙に吊
す。

掴み、宙に吊す。驚いて目をポツチり明き、いたいけな聲で
悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで
包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が塞りさうだから、
出ようとするが出られない。暫くもがいてゐる中に、ふと
足搔が自由になる。と、領元を撮まれて、高いく、所からど
さりと落された。うろくしてそこらを視廻すけれど、何
だか變な淋しい眞暗な所で誰もゐない。茫然としてゐる
と、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖しく寒くなる。
身慄ひ一つして、クンクンと親を呼んでみるが、どこからも
出て來ない。途方に暮れて、よちくと這ひ出し、夜中をた
だ獨り、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る、その聲

雨に打たれて、
見る間に濡れし
よぼたれ、怖し
く寒くなる。
よちくと這ひ
出す。

うんざりして。

が、さつき一度門前へ來て、またどこへかさまよつて行つた
やうだつたが、それがいつかまた戻つて來て、どこをどう潜
り込んだのか、今は啼き聲がまさしく玄關先に聞える。
私はたまらなくなつて、母に頼んで、この小狗に食物を與
へて、一晚泊めてやることにした。犬嫌ひの父は泊めたそ
の夜を啼き明かされると、うんざりしてしまつて、あくる日
は是非逐ひ出すと言ひ出したから、私は小狗を抱いて逃げ
廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐ
たが、しかしそれも一時のこと、その中に小狗も獨寢に慣
れて、夜も啼かなくなると、逐ひ出す筈の者に、いつしかポチ
といふ名までつけて、姿が見えぬと、父までが一しよに捜す

一目散に飛んで来る。
細い人參ほどの赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目がびつたりと合ふ。たまたまなくなつて私が横抱きに引

やうになつてしまつた。
朝起きて縁側に出る。私の聲を聞きつけると、ポチはどこにゐても一目散に飛んで来る。急いで庭へ降りると、ポチが透かさず泥足で飛びつく。細い人參ほどの赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目がびつたりと合ふ。たまたまなくなつて私が横抱きに引んだく。ポチは抱かれながら、身をもがいて大あばれに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、頤や頬までも舐める。父が顔を擧めて、穢い／＼といふ。成程考へて見れば、穢いやうではあるけれども、しかし私は嬉しい、止められない。どうしてこれが止められるもんか。私が何も好い

物を持つてゐるぢやないし、ポチもそれは承知ですることだ。利害の念を離れてゐるのだ。たゞ懐かしいといふ刹那の心になつてゐるのだ。毎朝これでは着物がたまらないと、母はそれをこぼすけれど、着物なんぞの穢れを厭つてポチのこの志を無にすることは出来た話でない。(『平凡』)

二五 婦人團體の母

小野賢一郎

小野賢一郎
新聞記者、俳人
燕子と號す
福岡縣の人
明治二十一年生

「母」とは奥村五百子の謂ひである。

五百子は肥前唐津高德寺の住職了寛の娘と生まれた。明治維新の亂れには、勤王のために男装して父の使を果したこともあつた。夫と縁うすく、第一の夫とは死別し、第二

荒膽をとりひし
いだ。

白刃の下をく
る。

孝子節婦。

の夫とは生別して、それから、専ら國事に心を碎いた。
五百子の負けじ魂はしばらく、男の荒膽をとりひし
名士に會はうとして、もし先方が避ける時は、握飯を携へて



小野賢一 耶

幾日も玄關に詰め切る位の事
を、平氣でやつた。白刃の下を
くづつたことすらも屢あつた
が、その一面には極めて涙もろ
い處があつた。そしてその涙
は君のために泣き、國のために泣く涙であつた。軍人のた
めに、軍人の遺族のために、孝子節婦のために、泣く涙であつ
た。かういふ五百子にはまた、針を持ち、庖刀を持ち、三味線

を弾き、舞を舞ふ優しい半面もあつた。

明治三十一年
(三五五)
光州
全羅南道光州郡
にある町。市街
の西南にある公
園内の光州神社
境内に奥村五百
子の銅像があ
る。

京城
朝鮮の主都。

事苟くも國家に
關して來ると。

明治三十一年の春、五百子は朝鮮に渡つて、光州に實業學
校を創立した。同時に、そこに日本村を建設しようとして、
養蠶の教師や、大工、左官、洗濯屋までを移住させて、朝鮮の開
拓に従事した。その時分のことである、京城の日本公使館
へ行つて、玄關をはひるや否や、何といふざまです。月給は
うんと取りながら、破れた國旗を掲げて居るとは。早く國
旗をお取替なさい。と叱咤したのは。そしてぼろ／＼にな
つてゐた日の丸が、間もなく新しい旗になつたのは。
萬事がこの調子で、事苟くも國家に關して來ると、五百子
は誰れ彼れの差別なく眞劍に眞向にぶつかつた。雷婆さ

「の異名はやがて全國に轟きわたつた。御國のために死ぬれば阿彌陀様が引取つて下さる」と口癖のやうに言つて、何物をも恐れなかつた。光州の實業學校は度々暴徒に襲はれたが、少しもひるまなかつた。

翌年七月、五百子は東伏見宮妃周子かむ殿下に拜謁を仰せ付けられた。女性の身を以て、國家のために、海外で産業を興し、宗教をひろめてゐる健氣な心掛をめでさせられたのである。その時五百子は、前後三時間に亙り誠心をこめて朝鮮の事情を言上した。そして、

ますらをも及ばざりけり國のため
こころつくしし君がまことは

といふ御親筆の色紙を拜受し、「死んでも心のこりはありません」と言つて感激した。

明治三十三年、五百子は北清事變の慰問使として東本願寺から支那へ派遣された一行に加つて天津へ赴いた。宿は日本領事館であつたが、一夜領事夫人鄭はま子から團匪襲撃當時の話聞いて、五百子の心に始めて一穗の灯あかりが點つた。話の大要は、かうであつた。

領事館の婦人達は義和團匪に包圍されると同時に、日本婦人らしく短刀を肌身離さず持つてゐて、萬一に備へた。砲煙彈雨の中をくゞつて、炊事や負傷者の手當に狂奔した。はま子は、大砲の音を聞きながら産婦のとりあげをもした。

天津
河北省。北支那
の商業都市。
鄭はま子
領事鄭永昌の夫
人。

砲煙彈雨。

領事館が爆破された時は、ま子は兩陛下の御眞影を移すために二階へ上つたが、漸く奉安した刹那に、大地の裂けるやうな音がした。「その時は、もう死んだな！と思ひましたが、目をあけると、人の顔が見えるではありませんか。」と聞かされる。五百子は泣き出した。

天津や北京で、日本の兵士が豚の死骸が浮いてゐる濁流の水で、炊事をしたり洗濯をしたりしてゐるのを見て、「軍人は國家のためとはいへ、實に一方ならぬ苦勞をしてゐる。せめて、戦死者の遺族や出征者の留守宅の人達を慰めて、あげなければ、天子様や如來様にすまない。」かう考へると、一たび點された五百子の心の灯はだん／＼とその光を

北京、
今の北平で明、
清兩朝約五百年
間の首都であつた。

五百子の心に點
された聖火が種
となつて燃えさ
かつた結果であ
る。

増して來た。百數十萬人の女性が團結してゐる今日の愛國婦人會は、實にこの旅行中に五百子の心に點された聖火が種となつて燃えさかつた結果である。



奥村五百子銅像
(愛國婦人會本部)

その後である、五百子が半襟一掛演説の行脚を始めたのは、

「半襟一掛を節約して下さい。その結果が戦死者の遺族や出征者の留守宅の人々を慰めて上げる大きな働をするのです。」東京の集會の席上や街頭でまづ舉げられたその叫は、次第に全國にひろがつた。被布に袴、草鞋穿き

津々浦々。

の五百子は津々浦々にその姿を現した。どこへ行くにも、宿料は一泊五十錢、汽車は三等と定め、會の金と自分の金とを嚴重に區別して、何事にも公私を混同することがなかつた。若し五百子の主張に對して心なき批評や嘲笑を加へたりする者があれば、徹底的に論議して譲らなかつた。「雷婆さん」は全國到るところ、雷を鳴らしながら、その君國を思ふ誠意に人を泣かしめた。

石川縣の或所で講演をした時のことである。五百子の熱辯に動かされて、入會の申込をした者も相當にあつたが、人々の立ち去つたあとに、洗ひ晒しの木綿の筒袖を着た三十歳ばかりの婦人が唯一人残つてゐた。そして五百子が

徹底的に論議する。

奥へ入らうとすると、「先生と呼び止めて、私は車夫の女房でございます。私のやうな卑しい者でも、その會へ入れて戴かせようか。私は軍人さんがそれほどまでお國のためにな難儀してゐられるとは知りませんでした。こゝに私が内職に草鞋を作つて賣りためた金が一圓あります。これでどうぞ入會させて下さい。」といふのであつた。その女は目いつぱいに涙をためてゐた。これを聞いた五百子が泣いたことは勿論である。

五百子は、その女が字が書けないといふので、代筆して入會申込書をこしらへてやつたが、その翌日は朝早く車夫の妻の家を訪ねた。そして「きのふは有難うございました。」

考へやうでは、
あなたのやうな
心の美しい方に
下さつたわけな
ので、私はそれ
をお取次するの
です。

私は、あなたにお禮を言はねばどうしてもすまない気がするので、忙しい中を繰合はせてお訪ねしました。これは東京を出る時、さる高貴の御方が、私の老體をいたはつて下さつた賜はり物ですが、これをあなたに差上げます。どうぞこれを着てお國のために働いて、立派な日本婦人になつて下さい。」と言つて、真綿のはひつた一枚の肌着を贈つた。向うが驚いて辭退すると、高貴の御方が私へ下さつたのも、考へやうでは、あなたのやうな心の美しい方に下さつたわけなので、私はそれをお取次するのです。どうか遠慮せずを受けて下さい。」と言つて、強ひて取らせた。

かういふ逸話は到るところに残された。日露戦争の時

Khaki.

helmet.

に愛國婦人會は七十萬人の會員を有する大團體となつて國家的な働をした。五百子は出征軍人を慰問するため、自分で考案したカーキ色の筒袖に袴を穿ち、カーキ色のヘルメット帽を被つて滿洲へ赴いた。兵士は五百子の眞心をこめた慰問の言葉に感激した。五百子は旅順の二百三高地その他の砲臺に上つて戦死者の靈を弔うた。

明治三十九年の秋、五百子は愛國婦人會の立派な發達に安心して退隱した。その時九段の偕行社で、總裁宮殿下御台臨の下に、盛大な送別會が舉げられたが、五百子は一生の思出にと、謠曲船辨慶の一鎖を謠ひつゝ、日の丸の扇を開いてしづくゝと舞ひをさめた。その中には、功成り名遂げて

總裁宮殿下
閑院宮載仁親王
妃智恵子殿下。

身退くは天の道と心得てといふ陶朱公の心境をあらはした一節があつた。
婦人團體の母は、かうして全國民に惜しまれつゝ、自ら創立し發達させた愛國婦人會を退いた。そして一層惜しまれ歎かれつゝ、翌四十年の二月五日を以て京都帝國大學附屬病院の一室に逝いた。

二六 世界無二の我が國體

下田歌子

國體によつて名こそ異なれ、世界の各國いづれも一種の支配者を有つてゐるのであります。日本國民ほど立派な

下田歌子
教育家
實踐高等女學校
長
岐阜縣の人
安政三年生

日本帝國が世界に對して最大無上の誇とする處は、上に萬世一系の天皇を戴いてゐるといふ點である。

君主を奉戴してゐる國民はありません。そして我が大日本帝國が世界に對して最大無上の誇とする處は、この上に萬世一系の天皇を戴いてゐるといふ點であります。

富も兵も文明も、國の成立上極めて大切なものでありますけれども、それらは漸次に増加し改善し、發達させることが出來ませう。美術工藝の方面に於ても、世界各國にそれ〴〵至寶とも稱すべきものが、昔から澤山ありますけれども、これとて天才の努力次第で、昔に立ち勝つた



下田歌子

三千年に近い歴史が自然に作つた國家と皇統とは、世界のいづれの國も絶対に眞似ることの出來ないものであります。

ものが製作されぬとは限りません。これらは凡て、人力によつて、短日月の間にすら、随分長足の進歩を見せることも出來ますが、しかしながら、三千年に近い歴史が自然に作つた國家と皇統とは、世界のいづれの國も絶対に眞似ることの出來ないものであります。たとひ今日以後に三千年一系の國體を作る國があらうとも、その場合に、我が國は六千年一系の國として先驅するでありませう。即ち我が日本國民は、世界永遠の歴史の上に於て、永久に萬世一系の皇統を戴き奉るといふ絶大の名譽を荷つてゐるのであります。更に國家と皇室との關係を見ますと、この點に於ても、我が國は卓然として諸外國に超絶する特徴を有つてをりま

外國では自國の君主を他國の皇室から迎へたり、自分等と同格なる人民の中から、皇帝や大統領を選んだりする。

す。外國の例を見ますと、新しい國家の成立つに當つては、必ず民族と民族との間に、國と國との間に、政府と國民との間に、或は人民同志の間に、激烈な鬭争が起つて、非常な慘劇が行はれました。彼等の間には必ず壓服者と被壓服者とがあつて、自國の君主を他國の皇室から迎へ、或は、自分等と同格なる人民の中から、皇帝や大統領を選むといふ結果になりますから、その間には自然に忠誠の念の厚からざる嫌があり、随つて、たゞ時代の推移が漸次反抗の力を弱め、反感の情を薄めて、幸に政府の施政が良ければ、親の代よりは子の代、子の代よりは孫の代と、治者被治者の間に少しづつ温かさを加へるだけであります。

君國一體
君臣同祖



今上陛下

日本の皇室と國家と國民とは、この點に於て、最初から成立を異にしてをります。一言にして盡くせば君國一體、君臣同祖の國なので、いひかへれば國家は即ち天皇、天皇は即ち國家であり、さうして私ども人民は、畏れ多いことながら天皇の御先祖と同じ御先祖を有つてゐるのであります。外國の皇室は國家があつて後に起つたので、日本の皇室は國家よりも先にあり、そして、國家が皇室によつて起つたといつても

日本の國民は、
一家族の發達したもので、我が皇室はその家族の中の宗家に當らせられる。



皇后陛下

いのであります。随つて日本の國民は、實に一家族の發達したもので、その家族の中の宗家に當らせられるのが、我が皇室であらせられるのであります。昔の源氏といひ平氏と申しましたものも、皆清和とか宇多とか嵯峨とか稱へ奉つた天皇の御裔でありました。そして私どもは更にそれらの末なのであります。即ち最初に皇室があり、住民があつて、茲に國家が出来たのでありますから、我が日本は、その國民に殆

日本の國民は、悉く皇室の忠良なる臣民である。

ど異分子を含まぬといつてもよい程に純一な國家であります。それ故日本の國民は、悉く皇室の忠良なる臣民であります。外國では、同じく帝王を戴く國民であつても、その悉くが必ずしもその王家帝室の忠良なる臣民とはいはれませぬ。共和國では、大統領が寧ろ國民の忠良なる公僕として働くのであります。かう見て來ると、國家と皇室と國民とが、その歴史の上に於て、またその感情の點に於て、日本の如くしつくりと一致した國が、世界いづれの所にありませう。こゝにこそ日本の國家統一が行はれ易い根據があるのであります。我が

秩序整然なる統一體。

國家は、國民が別に骨を折つて統一するまでもなく、皇室を中心として自然に秩序整然と統一されてゐるのであります。皇室に忠を盡くすといふことを第一の條件とすれば、それがやがて國家に義務を盡くすことになり、國家に義務を盡くせば、やがてそれが皇室に對する忠誠となるのであります。

外國には、國家國民の中心となるべき萬世一系の皇室がありません。彼等の中には國民各自生存の必要上、國家に忠誠を示さないことすらありました。また萬人に共通する宗教の力を借りて、辛うじて國民を統一和合せしめた時代さへもありました。これが外國の歴史に於て、宗教が大

きな勢力をなした理由の一つであります。然るに我が國に於ては、皇室中心の思想が國民精神の根柢に大磐石の如く基礎を据ゑて居り、しかも宗教以上の信仰となつて居ります。私ども日本國民は、よく我が國家本來の成立と愛國心の眞義とを理解して、この世界無二の國體を愛護するといふ國民第一の義務を忘れないやうにせねばなりません。

純正女子國語讀本 卷二終

昭和八年七月二十八日印
 昭和八年七月三十一日發
 昭和八年十二月六日訂正再版印刷
 昭和八年十二月九日訂正再版發行

純正女子國語讀本 卷二

定價金 六十錢



編纂者 五十嵐 力
 發行者 早稻田大學出版部
 代表者 山田 謙 吉
 印刷者 五十嵐 良 晃
 東京市淀橋區戸塚町一丁目五十八番地
 東京市牛込區榎町七番地

發行所

東京市淀橋區戸塚町一丁目五十八番地

早稻田大學出版部

電話牛込三四五番・三四六番



安田高等女学校

第一学年

中村トシエ